

日本歌人

日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
第六卷第二号 昭和三十一年一月二十五日印刷

通卷第三百二十二號

日本歌人

昭和三十年

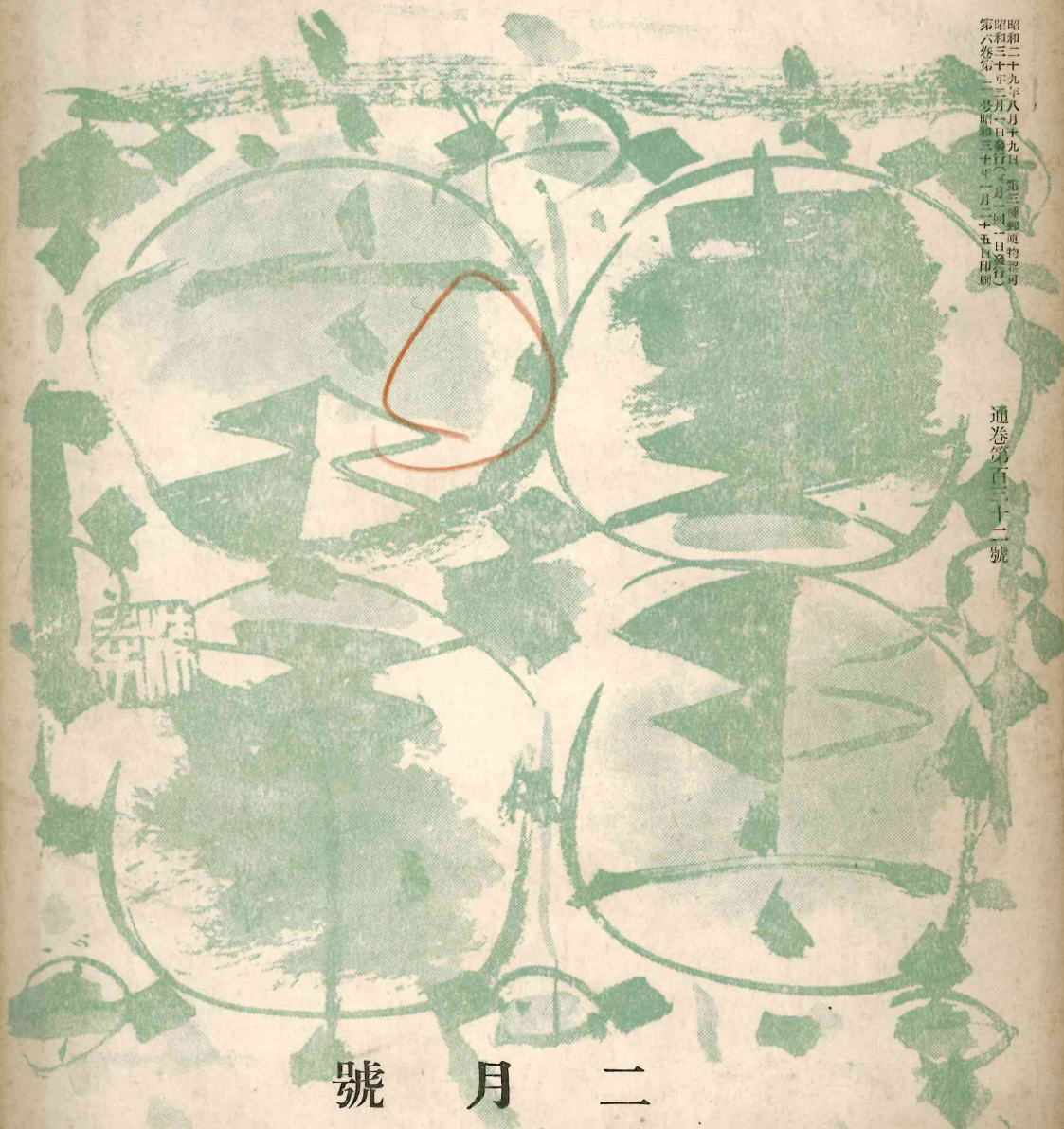
二月號

日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
第六卷第二号 昭和三十一年一月二十五日印刷

通卷第三百二十二號

定價 六十円



二月號

日本歌人



日本歌人社



日 本 歌 人
二 月 號

第三百三十二号 目次

新人に與へる	前川佐美雄	三
二月集		四
柘榴 詩的体験Ⅱ	横田俊一	六
作 品Ⅰ		八
作 品Ⅱ		三
山崎雪子歌集について	田中克己	六
横田利平歌集について	村野四郎	七
「ビキニの灰」について	長沖一	九
日本歌人集Ⅰ		一〇
日本歌人集Ⅱ		一〇
前川佐美雄論Ⅱ	小高根二郎	三
新 人 集		三
失敗といふこと	平光善久	四
石路の花	金子千鶴	四
消 息		四
發行所便	前川佐美雄	四
表紙 カット	棟方志功	四

新人に與へる

小文章その九

前川佐美雄

昨今は新人ばかりである。新人を探し出すためにどこもみんな躍起になつてゐるやうである。どことも言ふのは歌壇だけに限らず、俳句でも詩でも小説でも、又は美術や音楽や演劇や、その他各界にわたつて同様の現象が見られるからである。尤も新人の発見とか発掘とかいふのは、何も昨今にはかにはじまつたのでなく、いつの時代にも大なり小なりそれはあつたが、然し昨今ほど喧しく言はれる時代は先づなかつたのではなからうかと思はれ。

歌壇にしても「短歌研究」あたりが音頭をとり、他の結社雑誌もそれに倣つて、このところ新人ブームといふことらしい。まことに結構な時世であつて、それでひとかどの新人が出て呉れば大したものだが、新人と言つても多種多様な色々あるから、十代の新人もあるなら二十代の新人もある。三十代もあるなら四十代だつて五十代だつてあるかも知れない。私の如きはこの年になつても新人である。万年新人であるといふのを悔むのでも残念がるのでもない。むしろ新人であることを光榮とも名譽とも心得てゐるのだが、これは決して皮肉でも反語でもなく、正直にそのやうに思つてゐるのである。だからこそ十代二十代のわが子の如き青年子女と同列に雑誌に作品が並べられても不満は一口も言はぬ。一緒に眺ねたり踊つたりしてゐるのだから、このところ至極平和であり且つ長閑である。下手な平和論など全く無意

味なほどに歌壇は目出度し目出度しである。

ところで一昨年あたりから今年へかけて歌壇に紹介された新人はだいたひ十代、二十代、三十代ぐらゐの人々のやうだが、新人といふ言葉からすれば三十代よりは二十代、二十代よりは十代が本當の新人であらうけれど、私の文学芸術に対する常識観よりすれば、十代の新人なんてまるで信用してをらないのである。更に嚴格に言へば二十代こそこゝではまだまだ信用するに足りないのである。他の音楽や絵画の如き世界はこゝでは触れぬことにしておくれけれど、文学の世界、それも短歌の如き長い伝統を有つ文学にあつては、十代や二十代こそこゝで新人として紹介されるのは早すぎる。

今は時代が違ふといふものがあるかも知れないが、人間は一足飛びに大人にはなれないものである。将来は知らぬが、今は千年前とも余り變つてゐるのでないとするなら、十代や二十代こそこのものを下手におだてあげるのには寧ろ罪なことである。もちろんさうした若い者の新しい芽を傷めてはならぬ。それは田滿に成長させるべく適度に労り保護することは大事だけれど、甘やかしてはならぬ。きびしい修業をさせることの方が後にその人の為になるといふことをもつと良心的に考へなければならぬのではないか。折角「短歌研究」あたりが一生懸命になつてゐるのに、敢へて水を差すわけでないけれど、行き過ぎは養成出来ないのである。

何でも新しいものは貪婪に攝取せよ。そして新しいものをどんどん歌ひ出して行くがよい。更に十分生意氣であつても構はないのだ。それが十代二十代の特権みたいなものである。さうして大いに悪戦苦闘するのはよいが、早く歌人面をするだけで、また早く消え去るやうでは情ないといふことを戒心する必要があるだらう。



山崎雪子氏『海に近く』について

田中克己

大阪の南郷に高石といふ町があつて、そこに私は前後あはせて十年ちかく暮した。山崎さんは伺つてみると、私の小学校の後輩であつた。「海に近く」の海は、だから私のよく知つてゐる大阪湾、歌枕の茅渚の海である。

さう思つてこの歌集をよんで見て、ちよつとすかさされた。なるほど海の風景は出て来る。

海わたる風をききつ母となり母の仕草して愛しきろかも
わが知らぬ茫洋たる海もあるものを買へる魚肉に日光がさす
海上に月さしたれば白魚の多く獲れむとおもふ夜ごろぞ
はたはたと海岸通り花おちて少女のこしゆくひとすぢのリズム
白波を蹴たてるやうにゆく舟のへさきにありて空へゆきたし
夕かげの異様に赤き港町を魚さげてゆけば魚の目も赤く
くらしがりまこと雑多にあるものを夕照りあらき漁師町なる

婚生活を語つてよい紙面ではない。しかし山崎さんは、こゝで気がついたが生活を語らぬ一人である。

母としての山崎さんは

水こぼる朝けは吾子と二人ならび肌かぐはし素直さとなり
をさな兒の睫毛ふるへてものをいふ新月は織くのぼりゐるらし
両の手にわが子からだのせながら花散る春に立ちて居るかも
など教は少くても、実に正確に歌はれてゐる。しかし妻として、主婦としての山崎さんは

おのれ一人の哀愁を仰山らしく言ひ夜闇にしづます髪の濡れかも
夕ぐれに石鹼箱を振ることもきまりとなりて歌はれぬかも
ふつとあかるき翳がさしたれば街頭の店にりんごを買ひて持てりき
といふのが、それなのとしても、実にあはあはとほかされてゐる。

また私のことになつてすまないと思ふが、私は高師浜にゐる中に「コギト」に記載してゐたノヴァーリスの「青い花」が第一書房の長谷川巳之吉氏に見出されて本になつた。この小説はいふまでもなく独自のローマン派の代表作であつて、私がたどたどしく誤訳だらけで出すまでは、日本に訳のなかつたものである。高師浜にはロマンチックな縁故があると、いへばいへるだらう。

現実逃避とのゝしるならのゝしれ。詩の美しさは、この世ならぬものへのあこがれを歌ふことにあるのだ。ノヴァーリスばりに私は考へ世も考へた証拠に「日本浪漫派」と名のつた一つの文学運動が生れたのは、このすぐあとである。

海水浴場の賑はひを歌はない作者、「松露」や「はまごう」など海岸の植物——もう今はあるまいが——を固有名詞でうたはない作者、これこそロマンチックでなくて何であらう。現実を歌はず、したがつ

胸の中に疲れた思ひにじませて聞く潮さるや明日も日がつづく
これが高師浜や高石町の春と夏の風景である。夏はとりわけ海水浴場としてにぎはひ、方々には脱衣場や喫茶店が立ちならぶ。それらの経営者やそのお内儀たちは山崎さんや私の小学校の先輩、後輩、同輩である。大阪から来たすりやちんびらどもはなるほど歌の題材にはなるまいが、あの雑踏がちつとも歌はれずすませるとは——私は驚きもし感心もしてよみつゝける。

秋となれば海岸線の白さごとひとを忘れてさまひにけり
海岸は日が一ぱいに光るなりはるかに遠きことを思ひき
水に洗はれた砂の白さはそのむかしの寂寥に似てささふものなし
枯乏のつぎるあたりは砂浜のさらさらとして陽はしづかなり

砂浜を吹きぬけて来て風身に及ぶと髪かき上げておどろく日日ぞ
帰る日はいつこにありと胸に待てば白い砂丘のしらぬ方向
海の面光つて居るなり秋の日に白く悲しく底ぬけの光

秋の目をうけ波たえまなくひきてゆく音のこだまはかなしききり
秋ふかみ波ひきにひく海岸のこなたは墓地にしてかくも静かなる
「秋1」には、急に海岸の歌が連作として現はれる。どれもよいが

ここまで読んで来て私はうれしい。やつと高石町が現実の形をとまなつて出て来たのである。紀州街道と海岸との間の墓地は私にはおぼえがある。いや忘れ様もない、その南側の高師浜一八〇番地は、私がはじめてもつた家のあるところなのだ。歌を作られる小学時代の恩師西角徳太郎先生（桂花）に、家を世話していただいた。家主さんは広瀬さんといつた。何も知らぬ妻を親切に世話して下さつた。東隣は夫婦ともに小学校の先生、西隣は夫が不在勝ちで、男の子と女の子一人づゝをもつた奥さん、家内には何もかも教へてくれた。いや、私の新

てその批判にも及ばぬロマンチックはまた女性的でもある。

山崎さんがこの稀有な歌集を完成したのは、女性であることが幸せしてゐたとも思へる。しかし世の常の女性作者のいかにレアステイックな活動に熱心なことか。なし遂げ得ないことへのあこがれ——それは心情としてはロマンティックなことなのだが、表現し出されるものは反対の効果を示す。悲劇といふべきかもしれないが、私は冷静な文学史家としては、テアリスとしてなげうたう。

夜来れば寢床に入りゆるませる身体をもちて何の挽歌ぞ
うす寒く坐るに慣れし明け暮れや空光る時あなといひたり
なんの為によちのぼる木ぞ木は天空に手をのび出だしそれで終りぬ
夕べまた煮たきをすれば寒くしてけものめく目をうつむけてをり
師走近く猫銅ふことも寒くして住居のうへに雲のながらふ

これらは山崎さんの冬の歌である。なんといふきびしさか。このきびしさの基底は何か。私は自己をあはれむ思ひで、この作者に同感する。しかしこのきびしい歌を作る人は、現実にはやさしい面持をした女性である。それに一抹の安心をも感じながらではあるが。

歌集『ビキニの灰』について

村野四郎

前川佐美雄様

横田利平氏の歌集ビキニの灰について批評をかくようにとの御下命いただきましたが、短歌には全くシロウトですから、ろくなことが書

ける自信がありません。それに私は元来文学と音楽という二つの芸術ジャンルの間に、はつきりとした境界をひくことが、詩(広い意味での)という文学の文明のために必要だということを、私の詩論の根拠としていますので、またそれが新しい時代の要求に応ずる詩文学の運命だとも考えていますので、定型の音楽性というものを信用しない立場にあります。私の短歌の音楽性に対する考え方は、小野十三郎さんの考え方とは全くちがうので、小野さんのいうように、それが封建的ドレイ性の情緒的表現だからきらいという主観的嫌悪からではなく、詩という「文学」の純粹なメカニズムの上から、音楽とのナレアヒをみとめたくないのです。つまり従来の原始的で漠然とした「詩的なもの」という雰囲気から、「文学」の領域をはつきりさせたいのです。

けれども私は、言語機能としての「音」の機能を否定するつもりはありません。言葉そのものの「ビキニ」は、意味性と共に言語機能の重大な要素でしょうから。そしてそれは言葉の意味性をその内部から支えるものでしょうから。今日の現代詩人の音楽性否定論者は、ごく単純に詩から音を放逐するといいますが、そんなことはナンセンスだと私は思っています。私が問題にしたいのは言葉の韻ではなくて、律をいうあの意識的な音楽的構成による音数律、文学の領域ではなく音楽の領域で取り扱われるべき出来事です。

こんな考え方は、おそらく今日定型を信奉している唯一の定型文学者である歌人、俳人の諸氏からヒドイ非難があるとは思いますが、私からいわせると、今日の歌人、俳人はどうして文学としていちばん重大な言葉の「ビキニ」そのものより優先として定型の音楽的構成を絶対的なものとして重要視するのか、そのへんがよくわからないのです。定型が短歌という芸術ジャンルの不可欠の要素であるなら、それを絵

画における額縁のように残しておいてもよいでしょうが、それよりもむしろ文学としての意味性を完全にするため(イメエジの造型性のため)の言語のビキニの機能にもつと関心をもちたいと思つていのですが、それが私の現代短歌に対する不満でもあるし、又希望でもあるわけです。

つまりぬ理屈をならべてまことに恐縮ですが、これが短歌に対する私の卒直な考えですから、どうかおゆるし下さい。

ところで横田氏のごんどの歌集のことですが、そういう意味で、序文で貴兄が横田氏に御忠告しておられる箇所。「定型におさまるべき所を字余りや破調にして、そこから何らかの成功を期待しようとする」ということには、実のところ私にはあまり同調しかねるのです。事実それ程私には気にならない、というよりむしろ、そうしたところに短歌を新しく生かす実験も見られるのではないかとおもわれます。

又そうした意識でこの歌集「ビキニの灰」は鑑賞されたのが著者の希望ではないかとおもわれるのですが、いかがでしょうか。つまり「短歌」というものより、むしろそれに似たものがつた詩文学として。

私たちがポエジイとしてこれを味わうとするとき字余りも字足らずもさっぱり気にならないのですがどうも困つたものです。つまりこのところが、「短歌」の批評家として、シロウトでもあり、不適格者である所以であると、実は自覚しているわけなのです。

しかし早くいえば、そういう観点から私は、この歌集を非常におもしろい、興味ある文学として拝読しました。私は今まで見た短歌に見られないポエジイの領域をここに発見して、感心したわけです。私の好きな歌をあげれば、

抽象に人間が見えくる経済機構のなかのをとめよメカニズム 燈光ルミナを影して

全人類の黒き思考に沈みゆくビキニの白き灰し美し

風に揺るるチューリップの黄の平和にて人間われら何に武裝ぶさへる

金堂の柱にいつか眠りあつ盧遮那仏の思惟の深ふかきに

美しき秘密のごとく蝕もてる太陽を仰ぎ見ぬ指の筒かみより

いちにんの知性を守り抜くことの難き時代ぞ鶏頭とこやうきたなし

買はされし講和のばらを手の乞へば胸よりとらしめぬ叛戻り来て
また他にも沢山ありました。私は横田氏の文学の底に横たわつて
いる懷疑と恐怖の美学を直接にうけとることが出来たと、自分ではよ
こんでいます。そしてこの歌集は著者にとつても、新しい現代短歌の
ためにも、この上なく有意義で立派な仕事ではないかと思ひます。

もつとくわしくこの歌集の内部構造、情感と知性の生感に触れたい
のですが、あまり貴重な紙面を浪費しては、申し訳ありませんので又
いつかの機会にゆずり度いと思ひます。
貴兄と横田氏の御栄観をいのります。

歌集「ビキニの灰」

長 沖

一

横田利平君が歌をつくることを知つたのは、前川佐美雄氏の日本
歌人社の合著歌集「懸谷」を利平君から贈られ、この「ビキニの灰」
にも一部がはいつている「夕刊」の諸作を見たときであった。ばくな
どの門外漢が利平君の歌をうぬぬするのはおてがましい限りだが、

この歌集を通読して、ばくにもわかることは社会部記者として活躍し
ていた利平君がなわの時の批評的精神を失つていないことだ。いや、
ジャーナリストとしての経験は人生批判の眼光をいつそう広く深くし
て、高い調子で叙情のなかに打出している。往年の利平君の評論は鋭
さをうちにひそめて、あの柔和な紅顔にうかぶ微笑のやさしさでつ
つむ体のものであつた。それをおもうと、利平が今日抒情詩人であるこ
とも、また驚くにあたらない気がする。こんど二十数年振りに会つて
話しているうちに、利平君の精神はいよいよ若く柔軟に、ますますお
う盛であることを知つて、実にうれしかつた。

眸にあかきサルビアの花は揺れながらわが凝視めぐる顔の裏側

密林の祭壇に祀られし人間の肖像よケロイド醜し悪徳の果てに
鋪道を濡らす都会の雨に三カウントの放射能を算ふわが抒情限界

これらはばくの好みで抜いた歌にすぎないが、これらにもうかがえ
る実在的な思索や、それに裏づけられたロマンチズムや象徴のたぐ
いは、寡聞なばくには在来の短歌的叙情を大たんに打破つていと思
う。おそらくは旧套を墨守する短歌作家からは反発と嫉妬の入混つた
非難を受けるだろう。しかし今日ならびに明日の詩精神を打建てよう
と意欲する側の人たちからは共感を得るに違いない。素人の暴言をあ
えてするならば、いささか説明に過ぎて叙情をこわすたぐいのものがな
しとしないがねがわくは利平君がこの限界にあぐらをかかず、さらに
奔放な飛躍をほしきままにしていたきたいと祈るものだ。とまれ、
伝統的な短歌のせまき門をくぐり、それとの格闘を通じて短歌に新し
い息吹きを吹きこみつつある利平君の最初の業績に、たとえ小さな音
であつてもばくは精いつばいの拍手をおくる。

○京都忘年歌會——十二日(日)京都駅前旅館銀閣にて午後一時より歌會、午後四時より忘年會。小高根二郎、緒方親、服部三樹子、梁義夫、山村貴美、石川比良雄、手塚泰、澤上和子、北川樹、仲務、常田富美、奥春三、松本みき子、瀨本彩、中西育夫、見原種氏ら二十人餘。前川主宰は多用にておこし願へなかつたのは残念だが、來年度からは更に結束して京都歌會を盛大にすること、日本歌人の爲に挺身することなどを決議して、歳末の寒夜に散會した。(見原)

○北村美佐子夫人追悼奈良歌會——この春不慮の死を遂げられた北村夫人慰靈のため十一日(日)午後一時より雲井阪雲井莊にて主人昭信氏、令兄梅木春和氏を迎へて追悼會をひらく。荒天の日にて參會者は尠なかつたが、故人を悼むにふさはしい日であつた。前川佐美雄、横田利平、高木富貴子、豊本彌恵子、森牙子、吉村長夫、仲井雪恵、石田照代、森一郎、森田靜子氏らが集つた。(森)

○愛媛支部十二月例会——十一日(土)中萩町齋藤富海子宅にて午後一時より。會するもの十三名、出詠歌の互選批評、今年度の反省、來年度の出發方法など話し合ひ、最後に

二十六日忘年會を盛大に開くことなど決定した。(阪上)

○石川信夫氏。新刊の歌集「太白光」は非常に好評である。すぐに品切になるおそれがあるから日本歌人發行所か、直接に著者(埼玉縣豊岡町)又は長谷川書房宛に申込まれるとよい。別掲廣告参照のこと。

○横田利平氏。歌集「ビキニの灰」に就いて大阪毎日新聞學藝欄に長沖一氏の批評が出、又大阪朝日新聞婦人欄に「おすすめしたい本」として紹介せられてあつた。

○山崎雪子氏。歌集海に近くの紹介が大阪朝日新聞婦人欄に「おすすめしたい本」として出てゐた。

○西保恵以子氏。舊臘梅田善彦氏と結婚、梅田姓となる。

○古川政記氏。腸チフスにて入院中であつたが年末全快退院。

○東博氏。既に三ヶ月入院療養中であるが元氣の由。

○山中智恵子氏。再度入院加療中である。

○鍵岡正磯氏。自宅にて療養三ヶ月。

○田中温子氏。大阪より東京に轉住。

○上川こう氏。舊臘父君をうしなされた。

○太田水穂氏。「潮音」主宰、藝術院會員の歌壇の長老たる同氏は一月一日鎌倉の自宅にて老衰のため逝去せられた。享年七十九才。いづれ追悼文を本誌にも掲げる等だが、誌上より深く御哀悼申上げる。

発行所便

前川佐美雄

☆年頭に當り多くの會員諸氏より賀狀を頂いたことを感謝申し上げます。こちらよりは差上げず正月号の誌上より御挨拶を申上げておきました。が、勝手致しましたこと、不悪御許し下さい。

☆雑誌を編輯してをりますと氣ぜはしくてなりません。お正月だと言ふのにもう二月号を取りかからねばならないのですから一ヶ月ずれてゐるのではありません。先走つてゐるわけですね。これが歌の雑誌だからいやなもの。一般商賣雑誌、殊に少年少女雑誌や婦人雑誌となると十分二ヶ月ぐらゐ先走つてをりますから編輯者の頭が変になりはしないかと同情されます。

☆それはともかく一ヶ月先走るなら一ヶ月半先走つてもさう大した進ひはない筈です。半月先走るだけで半月早く雑誌が出るわけになりますから、ひとつそれを實行してみようかといふ氣になつたのです。その爲には歌稿をなるべく早く届けていただかなければなりません。今後前々月二十日の締切は嚴に實行して欲しいと思ひます。

☆即ち四月号の締切は二月二十日、五月号の締切は三月二十日といふわけです。以後同様です。正月号にも申上げた如く雑誌は今後絶

石川信夫著 (最新刊)
歌集 太白光 定價 三〇〇圓
送料 三二圓
名歌集「シネマ」の著者が、殆んど三十年ぶりて出した歌集です。石川信雄が石川信夫と変りましたやうに、その歌も幾らか変つて来てをりますが、本質は少しも變らず、それこそ現歌壇切つての詠み手が精魂を盡して歌ひあげた幾つかの雄篇を一冊にしたもので、珍重すべき稀有の大歌集です。現歌壇はどういふ風に受け入れるか知りませんが、この歌集の良さが分らなかつたら、それはそのもの恥です。敢へて口舌を弄するの愚を避けませんが、私は責任を以てこれを推薦するものであります。(前川佐美雄)

東京都台東区西町六
發行所 長谷川書房
振替東京四〇七六一
取次所
(奈良市坊屋敷町四一日本歌人發行所)
(埼玉縣豊岡町 石川信夫)

横田利平著
歌集 ビキニの灰 定價 二八〇圓
送料 三二圓

山崎雪子著
歌集 海に近く 定價 二〇〇圓
送料 二四圓
奈良市坊屋敷町四一
日本歌人發行所

規約抄

・日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
・日本歌人は會員と同人と維持同人とから成り、會員は一ヶ月八十圓、(誌代六十圓と同合せのこと)、同人は一ヶ月二百圓、それぞれ六ヶ月以上を納めるものとする。維持同人は内規による。
・投稿數は十首前後とする。但し一首を必ず二十七字以内楷書で原稿用紙に認めること。締切は前々月二十日までのこと、歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。
・添削は十首まで二百圓、但し返信用切手封皮同封のこと。
・問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと。
・原稿用紙はなるべく日本歌人制定のものを使用されたく一帖(百枚綴大判)百六十圓送料四十八圓、発売所(京都市下京区仏光寺御幸町西人有限会社讚美堂内日本歌人原稿用紙部)

日本歌人 (毎月一回一日発行)
定価六十圓・送料四圓
昭和三十年二月二十五日印刷
昭和三十年二月一日發行
編輯兼 奈良市坊屋敷町四一番地
發行所 前川佐美雄
振替大阪四七二八七番

日本歌人

八月號



日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
第六卷第七號 昭和三十年八月二十五日印刷

通卷第三百三十七號

日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
第六卷第七號 昭和三十年八月二十五日印刷

通卷第三百三十七號

日本歌人



日本歌人社

石川信夫著 (最新刊)

歌集 太白光 定價三〇〇圓 送料三三〇圓

山村貴美著 (最新刊)

歌集 砂の上 定價二八〇圓 送料二四〇圓

横田俊一著 (最新刊)

詩的體験 定價二〇〇圓 送料二四〇圓

日本歌人十五人集 (近刊)

歌集 魚道

古川政記著 (近刊)

歌集 葦の芽

淺野 晃著 (最新刊)

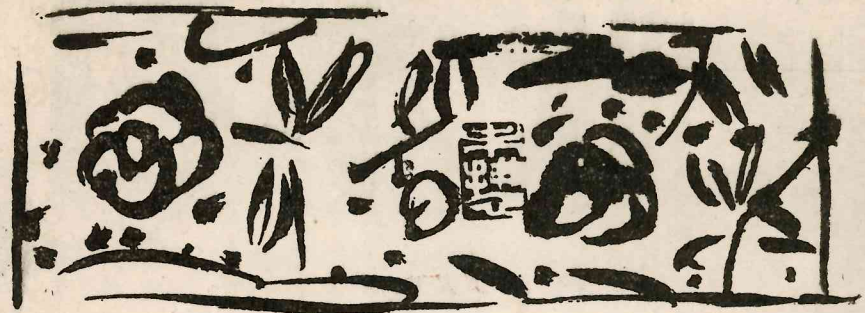
主義にうごく者 定價一〇〇圓 送料一六圓

奈良市坊屋敷町四一

日本歌人發行所

振替大阪四七二八七番

定價 六十圓



日本文歌人

八月 號

第三百十七號 目次

小文	前川佐美雄	三
八月集		四
現代詩の散文化	田中克己	六
短歌の課題	安騎野志郎	八
作品 I		一〇
作品 II		一四
神奈備の萩	堀内民一	一六
金唐篋	宮崎智恵	二〇
朝日歌話	前川佐美雄	二三
太白光讀後	中河與一	二四
日本歌人集 I		二七
日本歌人集 II		三〇
前川佐美雄論續	小高根二郎	三三
平井惠美の歌	保田與重郎	三五
新選集		三六
六月號作品評	梅木春和	三六
夏行豫告		三六
轉載歌		三六
編輯後記		三六
表紙・カット	棟方志功	三六

戦後十年

前川佐美雄

——小文章その十三——

この八月の十五日で、まる十年目の終戦記念日を迎へることになる。十年と言へば一番であるが、この十年間は實にめまぐるしく色々なことがあつた。色々なことがといふ以外に、咄嗟には適當な言葉も思ひ浮かばないほどに、心情まことに複雑である。しかしこの十年といふ都合のよい数字をたよりとし、それにかこつけて私は全く新しく出直したい希望を持つてゐる。

戦後にはかに流行した語に虚脱といふのがあつた。日本人は戦争に敗けてみな虚脱状態におち入つてゐるといふのであつたが、それもひとしきり喧しく言はれた後は、いつかそれから脱けたとでもいふかの如く、しばらくにして誰もそれを口にしなくなり、やがて民主主義がとねられると忽ちにしてそれに靡き、途端に泰平の時代が一足飛びに來たかのやうに戦争の痛苦も忘れ、敗戦國民であることも忘れて、戦前とほぼ同様の日本にかへ

り日本國民にかへつたかの如く錯覺し出した。たしかに錯覺してゐるのである。たとひサンフランシスコ會議が終り獨立の體裁を與へられたと言つても、その實體の何であるか知らぬは皆知つてゐる筈である。それなのに國の政治をはじめ、外交から經濟から國民個人のはしはしに至るまで、その言ふこととすることのすべてがどことなく上つ調子である。國全體が何となく浮き浮きしてゐて、これこそ戦争に痛みつけられた日本の本當の自主的な考へや行爲だと見られるやうなものがある。根なし草のたよりなさと、またはタイズみたいな流行のはかなさともとれる。

だから今日「アメ公歸れ」のプラカードを擔ぎ出して反アメリカを叫んだり、見もしない「鐵のカートン」の内側をいたづらに憶測して憎惡の眼を向けたり、又は、元來が押しつけられた憲法であるにかかはらず、今ではそれを平和憲法としてあくまでも守るべきだと言ひ出したり、獨立國として憲法は改正すべきであり、しなければ自衛の軍隊の一つも置けないなど言ひかけたたり、時と場合では都合によつてどうにでも立場をかへてアペコベになるところ、左右とり交せてこれは甚だを

かしいではないか。

世界は二つだからと言つてしまへば簡単だし、さうして世界情勢はまた猫の目のやうに變るから、このことは實にやむをえないといふ理由も分らなくはないが、しかしその言ひ方とその仕方が正常でない。それは慎重を缺くといふ程度のものでなく、その言動には責任が伴つてゐない。つい目先だけの利益に目が眩んで、附和雷同してゐる形である。敗戦の苦痛が身に沁みてゐるのかあないのか、今の日本としては他に更に考へるべき、またなさらばならぬことは山積してゐる筈だがみんなよい氣になつて浮かれてゐる。善意に解してこれは敗戦直後の虚脱状態からまだ本當に脱け出でゐない爲ではないのか。或は全體に精神が錯亂してゐる爲ではないのか。冷靜に見て實に不思議な國のをかしい國民である。さてこの間歌壇は何をして來たか、言ふ必要もないことながら、歌人は日本人として最も善良な部類の人種に屬するから以上這般の國內狀勢を最も敏感に反映し、その一小縮圖を描いて來たと思へばよい。みな浮き浮きとして餘り大したこともない歌に附和雷同し、さうして誰も讀まない歌集が實におびたしく氾濫しただけであつた。

現代詩の定義がむづかしいが、明治も中ごろを過ぎて、やつと形も出た日本の詩で、現代と限定してふことの方が變なのである。しかし藤村や泣菫となると、ついこの間まで生きてゐた人ながら、その作品を現代詩といふことには、躊躇する。そこでまあ昭和の詩をでも現代詩と呼ぶことにすれば太過なからう。近ごろ出た「昭和詩集」(角川昭和文學全集第四十七卷)などは百數十家の作品を集めてゐるから、これあたりが現代詩人の作品集にあたるのであらう。しかし同業びいきでいふのではないが、こゝらあたりの作品は上手下手はありながら、さすがに詩は詩だけの形をつけてゐて散文とは違つた相を呈してゐる。

だからこの人たちの後が問題なのである。このごろ盛になつたと傳へられる職場や組合ごとの詩人たちの作品集や、小中學生の作品集は私は見えてゐない。たゞひとごとで想像するだけなのだが、私をしてよりよく想像を可能にさせるのは、實は近ごろの短歌なのである。短歌の世界は詩の世界と同じものだと考へてゐた私の觀念を、微塵にうちくたく種類の作品が多い。そこに歌はれてゐるのは——形や調のことは問題外としても——一圖に散文の世界なのである。

しからば私のいふ詩と散文のちがひはどこにあるか。西洋の詩にあつたソネットやスタンザなどの形式や韻は、日本では採り入れやうがなく、その代りに七五調を用ひたが、これが捨てられたあとのいはゆる

る自由詩には内容だけが問題となつた。さてその内容が「憧憬」を詩の本態とした浪漫派でなくとも、おのづから散文と異つたのは勿論である。「美」といへば語弊があるが作者の美的感情の言語的表現が詩のありかただと私は考へ、他人にもさう説いて來た。ポードレルや朔太郎の例が示すやうに個人によつて偏差のある美的感情ながら、みなその適正な表現に心を傾けるのが詩だと思つて來た。しかし何を古くさい、とでもいふかのやうに、世間では詩論や歌論よりもむしろ作品がこれに有力な反對をしなければたかのやうに思ふ。

私はその理由を三つ四つ考へることが出来ると思ふ。第一は詩を作らうとする青年たちが、古典を知らないことである。これは一方にはもつともなこと、戦中戦後この間までの青年に、「月下の一群」をよみましたか、「珊瑚集」は？ 上田敏詩集は？ 朔太郎は、達治は？ と矢つぎ早にたゞみかけて聞けば、彼等は一様にそんなものは見たこともないと言へるのが當然だらう。それぢや中野重治の「夜明け前のさよなら」、小野の十三郎「大阪」はときけば、これも最近と答へるのがせいゝだらう。詩になる美的感情はともかく、これぢや毎日よんでゐる新聞や月刊雑誌の投稿欄しか、詩を教へてくれるものがないのぢやないか。「月下の一群」は私たちが少年時代に愛讀した堀口大學譯のフランス詩集だが、この頃になつて文庫本が出(新潮文庫一二〇圓)、その跋文をよんでみると、戦後白水社から改版が出たが、八

〇〇圓でみな手が出なかつたやうだとある。戦前の値段にくらべるとこれでも高くないのだが、古典などよまなくても詩が出来るといふ考へがある中は、いくら安くしたつて賣れる筈がない。この古典無視はあなたが詩壇だけではなからう。「赤光」はよみましたか、「立春」は？「植物祭」は？と歌を作る若い人と話しあふ機会があれば、一度私もきいてやらうと思ふ。

第二の理由は文部省の國語教育の方針と、これと實によく一致してゐるジャーナリズムの用語方針とである。文部省の常用漢字採用は、國語教育の端であつた繁雜な言語の簡素にも資すること大で、お蔭で我々の家庭でも子供たちはラジオやテレビをきく時間をもち、夏は海水浴、冬は何と十分たのしくおくらしたがこれが詩歌の世界にはやはり影響を及ぼさずにはをられない。國語の簡素化は三十六色の繪具を六色に限定したやうなもので、何とか救ひやうもあるのかと見てゐたが、用語の貧困が詩歌をおのづから散文の世界に追ひやることは自明の理である。彼等が閑をもつて聞くことを得たラジオやテレビで用ひられる語がまた甚だしい。ギョッやアロハのあんちゃんや詩歌の世界にそのまゝとり入れられたのである。

第三は詩の世界から抒情の排撃され出したことである。リリズムの時代ではないかもしれない。いかにも水素爆弾の君臨する世界である。しかし私どもも經驗のある少年のリリズムの代りに一體何が入ればよいのであらう。革命精神、ヒューマニズム、いづれも高度に知的な世界で、絶對素朴な感情で營まれてゆくものであつてはならない。貧困は昔から詩人に必然の運命で、詩歌の素材であつたが、人がこれから脱却しようとするとき、その賢い眼と口とはもう詩の世界からぬけ出してゐるのではなからうか。

隣の國は中共になつた。そこでどんな詩が作られてゐるか、私は興味をもつて見てゐるが、今のところまだ勤勞意欲をかき立てるスローガン以外にはないやうに思ふ。たゞロシア革命のあとと違つて、古典が續々と廉價で出版されてゐるのに驚いてゐる。人民詩人としての白樂天や杜甫はもとより、酒と女だけの享樂詩人と考へられた李白の詩さへも盛んに出版される。人民の愛する詩人としての李白、この歴史的評價にすなはに頭を下げる當局に、私は好感をもつ。

しかし日本では白秋にも朔太郎にもまだこの歴史的評價がない。藤村の詩と啄木の歌とがやつとこれをもつものかと思ふ。それさへも中國の出版部數に比べれば少なすぎるのである。尤も中國と日本とは國狀がちがふ。彼等は敗戦國ではなく、しかも建設の途に着いたのである。我々は……といふ人があれば、結構なことだ。その人は出来るだけおのづからなる美的感情の發露などはおさへて、詩歌よりもつと役に立つことを一生けん命におやりになり、もし必要だつたら散文で——それもなるべく文學的でない——その抱負なり指令なりをおのべになれば宜しからう。その時こそ詩歌は、作る人數も少くなり、その代り散文文化から免れることが出来るだらう。私は詩人としてその方をよろこぶ。商賣をはなれて喜ぶものである。

(この間、堀内民一さんのおきゝの席で同じ題で話した。うまくいへなかつたので、この場をかりて補足しておく。機會を與へて下さつたことに對して、「日本歌人」に厚く感謝する。)

轉載歌 (二)

前川佐美雄

醒井養鱒場即吟

伊吹嶺の黄に照るときを窓谷川の峽行けり
水上の鱒を見むため
五十萬尾の鱒の魚あそぶ池見をり秋晩き今を
紅葉散る下に
うつつなく池の清水に浮く鱒の幾百幾千みな
おなじ向き
抽象畫よりも青く澄みたる池水に鱒の魚列び
みな夢見をる
池の邊に荒むし敷きてその池の鱒食ひをる
に紅葉散り散る
この池の鱒を食ひ酒にや酔ひて紅葉暮れ黒
む夕べまであつ(短歌一月號)

同類

去年の春の實生楓が十本ほどみぢせる鉢
を枕べに置く
小石ひとつ虹のごと青く光りしが再びを見む
君にあふまで
かくのごと同類十人あひ寄りて塵よりも暗く
酒飲みあたり
死の灰におびゆる夏に輝りたるかの池の蝌蚪
いかがなりつらむ
ダンヒルのパイプ出で來しよ十年ぶりに書棚
置きかへし塵の中より
東京より來し少女らをとまひて業平の像見

編輯後記

編輯委員會として最初の八月號である。編輯
に從つて、はじめて色々の苦心が身に沁み
た次第である。こんな苦勞が前川主宰にいま
までどれ程あつたことだらうか、唯々申わけ
ない。委員一同は、いよゝゝ協力し、一段
と力強く前進する決心だから、今後もつと、
強力な會員倍加運動と御協力を會員の皆さん
に願つておく。
▽本號二十六頁社告の如く、日本歌人吉野夏
行には賑々しく、同好相携へ御参加いたゞき
たい。参加希望者は各自の参加日程等を速刻
發行所へ連絡通知してもらひたい。八月十五
日に締切。案内はこの社告をもつて代へる
▽編輯してゐる一番困つたことは、わかりに
くい字で書き流してある原稿だつた。規約を
よく読んで大判の原稿紙に楷書でわかりやす
く書いてもらひたい。便箋は不可。小型のも
のは、なるべく避けてもらひたい。取扱ひ上
非常に困るのである。それから自主的に責任
をもつて、原稿締切日前々月二十日を守つて
もらひたい。
▽會費も納める人はよく納めるが、怠つて納
めない人は、不合理だから、早速善處しては
しい。くれんもよろしく。
▽今月號は文章が充實した。好評連載中の、
横田俊一氏の「詩的體験」が終り、あたらし
く、詩人田中克己氏の「現代詩の散文化」を
得た。ひきつゞき一ヶ年にわたり、種々な觀

ま知りてわれはふとりぬ(坂梨清子)

すも出でたつ
少女らをとまひをれどわがころ茫々とし
て大和野を行く
古寺のつづらの中にしまはれてこの秋の紅葉
を見ぬ白き面
醒ヶ井の鱒見に來よときそはれて黄なる伊吹
に向きて降り立つ
青きなか自由自在に遊びぬれば光りひらめき
斷ち切られたり
平群の熊がしが葉はこれかとも葉廣がしほの
枯葉持てかへる
塔の上の露盤に立ちてうつさしれし十九の夏の
寫真かこれは
醒ヶ井の木彫の小鳥もとめ來てアブストラク
トの花にとまらす
ストのころしげくしならむ歳末に向ひをり夜
更けの時計が寒し(短歌研究一月號)

醒ヶ井養鱒場即興

東京行の汽車に乗りをれど米原の次ぎ醒ヶ井
に降りて鱒池見にゆく
妻さそひ伊吹ふもとの山みづに養はるる醒ヶ
井の鱒を見に來ぬ
今日の日も暮るなり十一月の終りなり黄の
伊吹山のいたゞきの紅
山みづにあそべる鱒を食ひし後三十人が夕紅
葉惜しむ
池のなか若青くむせる岩あれば鱒のめぐりを
りき滑らなるみづ(短歌新聞一月號)

す。眞率な心情。

乎ひて心の底を見抜きしと波紋の如くひ

初瀬と當麻

東京の開秀歌人十人をいざなひて初瀬の牡丹
見に行く
百八間の登り廊下に汗あへて佳きひとと見し
左右の牡丹花
登り廊下と子院のあひの牡丹園斜にまぶしく
百花咲き照る
藤浪のなびく三尺ささげ持ちこの登り廊下行
きし十歳ごろ
不幸なる中將姫のごとからず観音よめぐしき
だけわが子に
俊成家父子の碑石は銀杏の下若葉のなびく
今日は詣らす
双塔を霞のなかにもめつつ當麻に來つれ牡
丹の花見に
緋の毛氈に盥をささげて茶喫むとき百千の牡
丹咲き盛りたり
うぐひす張りの長廊下ゆく佳き人に白砂の庭
の牡丹照り匂ふ
百千の牡丹花にたんのうし歸り來るげんげ田
の道雲雀聞くなり(新論七月創刊號)

三輪明神

三つ鳥居瑞垣の奥をひそとあふぐ木立闇く
して鳥も鳴かざる
われいまだ總道祭の神事知らず來む年は見
む淨き忌火を
病みこもる妻のため狹井の眞清水を青竹筒に
汲みて去なむか

規約抄

- 日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
日本歌人は會員と同人と維持同人とから成
り、會員は一ヶ月八十圓、(誌代六十圓と
混同せぬこと)同人は一ヶ月二百圓、それ
ぞれ六ヶ月以上を納めるものとする。維持
同人は内規による。
投稿數は十首前後とする。但し一首を必
す二十七日以内に楷書で原稿用紙に認める
こと。締切は前々月二十日までのこと。歌
稿の末尾には住所氏名を明記すること。
添削は十首まで二百圓。但し返信用切手封
皮同封のこと。
問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと
原稿用紙はなるべく日本歌人制定のもの
使用されたく、一帖(百枚綴)大判百六十圓
送料四十八圓、發賣所(京都市下京區佛光
寺御幸町四入有限會社讚美堂内日本歌人原
稿用紙部)發行所では取り次ぎはしない。

日本歌人

(毎月一回二十日發行)
定價六十円・送料四円

昭和三十年八月十五日印刷
昭和三十年八月二十日發行

編輯印刷兼 前川佐美雄
發行所 奈良市坊屋敷町四一番地

發行所 日本歌人發行所
奈良市坊屋敷町四一番地
振替大阪四七二八七番

日本歌人

九月號



日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
昭和三十年九月二十日發行(每月一回二十日發行)
昭和三十年九月十五日印刷
第六卷第八號

通卷第三百三十八號

日本歌人



日本歌人社

日本歌人

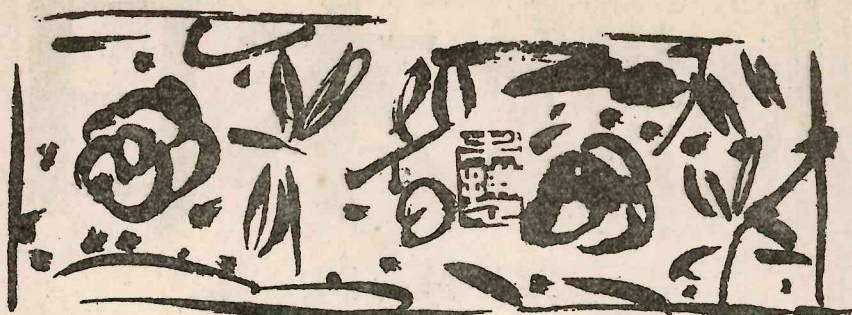
昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
昭和三十年九月二十日發行(每月一回二十日發行)
昭和三十年九月十五日印刷
第六卷第八號

通卷第三百三十八號

定價 六十圓(送料四圓)

石川信夫著(最新刊)	歌集 太白光	定價三〇〇圓 送料三二〇圓
山村貴美著(最新刊)	歌集 砂の上	定價二八〇圓 送料二四〇圓
横田俊一著(最新刊)	詩的體験	定價二〇〇圓 送料二四〇圓
日本歌人十五人集(近刊)	歌集 魚道	
古川政記著(近刊)	歌集 葦の芽	
淺野 晃著(最新刊)	主義にうごく者	定價一〇〇圓 送料一六〇圓

奈良市坊屋敷町四一
日本歌人發行所
振替大阪四七二八七番



日本文歌人

九月號

第三百十八號 目次

小文章 (十四).....	前川佐美雄.....三
九月集.....四
現代詩の散文化 (二).....	田中克己.....六
短歌の課題 (三).....	安騎野志郎.....八
作品 I.....一〇
作品 II.....一三
コスモス 逍空秀吟 (四).....	堀内民一.....一六
朝日歌話 (三).....	前川佐美雄.....一八
石井の水 (三十五首).....	堀内民一.....二〇
「砂の上」寸感.....	浅野晃.....二三
日本歌人集 I.....二四
日本歌人集 II.....二五
寫生派との對決.....	鳴上善治.....二六
新選集.....二七
消息・轉載歌.....二八
後記.....二九
表紙・カット.....	棟方志功.....三〇

精神の低さ

——小文章その十四——

前川佐美雄

新聞や雑誌の投稿歌の選をしてゐてさへ屢々思ふのは、歌の世界もひろくなつたといふ感慨だ。歌の領域が大きくひろがつて來てゐるのである。花鳥風月が主となつてゐた頃に比べると文字通りまさに隔世の感がある。今は歌へない何ごと、また何もものないといふ有様である。この限り短歌萬々歳で、滅亡論も何もあつたものでない。歌こそ日本人にとつて實に萬能の詩であると言つても差支へなく、短歌否定論者にこの事實をよく説明して見せるならば、あるひは成程と納得してもらへるかも知れないだらう。

しかし數年前のことである。川柳作家の岸本水府さんが或る歌人の歌をとりあげて「これは歌ではない。川柳にすべきだ。川柳にすべきところを歌にしたつて意味がない」といふやうな意見を新聞に書かれてゐたことがある。それは現代短歌の墮落とその日常的粗末主義を非難し揶揄するものであつたけれど、同時に川柳への侵犯をなじる風のものやう

であつた。私はこの岸本説の正當さに賛成しないわけには行かなかつたのだ。

これはほんの一例である。同じやうな非難や攻撃が俳句の方からも發せられてゐるやうだけれど、俳句は歌と共に戦後外部からいじめられた側に屬するから、同類のよしみの故にか川柳の岸本氏ほどに正面切つて歌に對する人は少いやうだが、しかし私は以前からこのことを屢々口にして來た筈だ。歌が俳句の領域を侵し、俳句的發想をとり、俳句化するとは歌の自滅を招來すると。その源は例の歌壇だけに通用する、牢固として抜き難いリズムにあることを言ひ、それに對する詩的恢復と詩的想像力の昂揚を説いて來た筈である。しかし川柳側からの非難と揶揄を見るに及んで、歌は俳句だけでなく、今や川柳の領域をも侵し川柳の世界にひろがりつつあるといふ事實を知つて一驚したのであつた。

花鳥風月の領域だけでなく、歌の世界がひろく大きくなつて來たことは喜ばしいが、俳句的になられてはもろろん困るし、川柳的になられてはなほさら困るであらう。さういふ俳句風や川柳風以外に今日大きく目立つことは新聞雑誌の雜報記事に類する歌の多いこと、井戸端會議風のおしやべり、その無意味

なまな無駄口と不平や不滿の世間ずれした批評風の歌の多いことである。一口に言へば日常生活の粗末主義以上の何物でもないが、さういふのが思想とか社會性とか生活とか庶民の倫理などといふ美名にカバーせられ、一様に現代短歌と稱せられてゐるのだから、歌を作る人が増加し、歌の領域がひろげられても歌そのものには直接益する何物もなく、高い場から眺めて歌は詩でも文學でもないといふことになるのである。

正直に言つてむろんさういふものの中にもよい作品がないわけでない。面白いと思はれるものもあることはある。單なる花鳥飄詠に比べて確かに今日の歌だと主張してよいと思はれるものもある。進歩し發展してゐると考えられるものもあるけれども、何故このやうに低い場から歌ふのであらうか。歌ふ精神の在り場所が低いのである。それは低いところにゐるから低い精神で歌はねばならないといふのか。それが時代精神であり時代に誠實だといふのであるか。若しさうであるならまた何をか言はんやである。低い場があればこそ高く精神を持すべきであるにかかはらず、寧ろ低きを望んでゐるかのやうに見えるのが今日の歌壇の大體である。

現代詩の散文化

(二)

田中克己

去年の夏は元気で、夏休みになるかならないかに上京し、親友たちと久淵を敘し——といふと難かしいが、久しぶりでしゃべりあひ、田舎者になつたことを痛感し、そのくせがつかりもしないで歸つて来た。歸ると溜めておいた仕事が目白いやうにはかどつた。

ところが今年の夏は、物凄く暑さのせいもあつてか、家ではグンナリしてゐて、頭もろくすっぽ動かない。それで運悪く夏から書くことになつたこの欄も、大變な重荷になつてしまつた。はじめに弱音をかういつておけば、もういゝだらう。首尾一貫しないことを承知で書かしていただく。

暑さをいつた序でに考へて見ると、夏の暑いことは當然だが、これ位の暑さは私は私には始めてではない。昭和十七年に佛印のサイゴンに上陸して、その蒸暑さは十二分に経験した。夜半すぎてもまだ暑く扇風機を廻しては止め、とめては廻して明け方にやつと眠りに就いた。これで毒氣をぬかれたせるか、シンガポールではさう暑さにはへこたれず、體重もだん／＼増した。なにもまた思ひ出せば昭和八年に臺灣へ行つて、臺北の下宿で蒸暑いの弱つたこともあつた。以上二回と、終戦の年、二等兵で華北にゐて、寒暖計を見ると日中百數十度なのにびつくりしながらも、上半身裸體を許された兵の生活はさう苦しくもなかつたと思ひ出すと、今までは私もわりあひ暑さに強かつたのだと氣がつく。今年だけはなぜこんなにこたへるのか。老いた

のだらうか。

本當に老いこんだのかもしれない。老年の特徴は過去の美化と未來の嫌惡とに著しくあらはれる。過去の美化は老年性健忘症のせるもあるが、未來——即ち死への嫌惡と必然的に結びついてゐるのだ。しかしあながちさうとばかりも云へないのは、私自身氣がついて見ると、若い時から未來にあまり希望をもたず、反面過去に執着しがちだつた。専攻の學科に歴史を選んだことなどもその證據である。同じく過去——たゞし漠然と過去すべてではなく——中世をその理想とし、憧憬したドイツ・ロマンティークが好きで、その代表的作品であるノヴァーリスの「青い花」を譯したのなどもやはりその證據である。このやうな歴史家があり世間の役に立たないことはもとより自明の理で、どこへ行つても歴史家の名で呼ばれたことはない。

たゞし詩人としても、憧憬をうたふよりも、憧憬の世界とあまりに懸け離れた現世を、批判するよりむしろ諷刺する立場にまはつたと見られて、私はこれまた不評である。批判なら小野十三郎先生のいはゆる詩の本道(「短歌的抒情」創元社刊、参照)にかなふわけであるが、あまり利かない氣のぬけたワサビのやうな私の皮肉は他人には無効、自分自身に利くだけで、詩人の方も開店休業のかたちである。

さてこの間自費で出した「戦後吟」は、この臆病な詩人が、勇氣をふるひおこして、手ばなしで泣き笑ひをしたのであるが、これまた小

高根二郎先生から「アイロニー」的所業の結晶と見られてしまつた。同先生の仰せの通り、現在の歌壇は「あまりにも現象主義的」かもしれないが、歌壇のそんな現状を、なに私が知つてゐたことか——もし知つてゐてアイロニー的にやつたのでは、へそくりをフンダンにせびり取られたか、あ殿が先づ「およしなきいよ」で承知しなかつたらうと思ふ。といつて亭主の戀歌を載せた歌集に大枚を投げうつた彼女の心中は、私自身付度したこともないのだが、詩の作品ではこんな目にとび／＼會はされてゐる彼女のことだから、歌が詩とはちがつて寫生を主とするなど精木赤彦先生ではあるまいし、毛頭考へるはずもなくまたつまらない空想をしてゐるわ、位ですんだのではないかと思ふ。ともあれ親愛なる二郎先生、アイロニー的なぞと、短歌の世界に「詩的批評」精神をもちこんだかの如き誤解は一應と消していただけないでせうか。

たゞし現象主義はいざ知らず、あまりに瑣末な事件報告的短歌は、私も苦々しく思ふ。歌會には出たこともないが、時々目にする諸歌誌上の奥様方の作品で、物價騰貴、乃至その横這ひ、子供の遠足、PTAの總會、旦那様の所業批判などは、公開の席にはあまりお出しにならない方がいいと思ふ。といつて「思想とか哲學とか宗教とか、又社會問題、經濟問題、政治問題など」(小野氏前掲書十二頁参照)は純粹詩人のいひ方ではないが、小野先生をはじめとする詩人の方々、もしくはジャーナリズム、乃至議會におゆづりいたゞいて(その詩や新聞雑誌や議會が本分を盡さないからこそ、我々歌人は歌はざるを得ないのだと仰しやるかもしれないが、私の考へではあなたがた歌人はやつぱりこゝでは歌ふのをよして、むしろ論じなかつたらよいと思ふ)短歌的抒情精神にもとづく抒情を主とすべきだと思ふ。家庭の内情や

社會惡の暴露よりは情緒の本音をお打明けになる方がありがたいと思ふ。そんなのは古往今來みな一樣で古くさいと仰せになるかもしれないが、古くからあるからこそ歌ふ値うちもあり、その表現に苦心の甲斐もあるのだといひたい。たゞし新しい表現の方法として、古人の使はなかつた口語をお用になるのは、ちよつと卑怯ぢやなからうか。もとより原爆だの水爆だのと、新型の單語もあまりお用にならない方が安全であらう。三十一文字を無視なかつたら詩の世界だが、こゝでは「短歌的抒情」やリズムの存在を許されてゐないことは前述の書の説く通りだから、御遠慮無用である。

思へば私など不幸な生れつきだ。せい一杯、蝶よ花よと歌へた年ごろは、革命近きにありの聲におびえて、冷徹氷のごとき心境を吐露しようとし、戦火たけなはになると、一心に警防團。夜目にも明るく東京の燃えたあとは兵隊となり、海外から復員すれば世はあげて民主主義、乗り換へんとすれば立ちおくれ、萬巻の書を読んで不動の精神を得ようとしたが、この激動する世界にまにあはず右往左往、これこそ自由主義の本流かと見定めた流れはいつのまにか細つて、途方にくれさす。その流れの名こそヒューマニズム。一昨日は廣島に原爆の落ちた日、昨日は日米對抗水上に日本の勝つた日、明日は長崎の原爆記念日。これらは詩歌の材料になるか、ならぬか。ビキニの灰は多くの歌人がうたつたと、角川書店發行「短歌」七月號は録してゐる。そしてビキニの灰の犠牲者の未亡人は、廣島で人々からうらやまれたわけが始めてわかつたと語つたといふ。私はこれらの記事を前にして感動をとゞめ得ない。しかしそれが詩になるか、歌になるか。とまれ私は明日からは歴史の論文を一つ書き出す豫定である。この問題はそれがすむまでの宿題にしておくこととする。

「砂の上」寸感

浅野 晃



山村貴美夫人の處女歌集「砂の上」を
いただいて、近來になくたのしい時間を
持つことができたのを、ありがたく感謝
したことである。求められるままに、讀
後の寸感をつづつたが、これは批評など
といふわけでなく、わたしの好きな歌の
中から拾つて、ほんの寸感をのべただけ
である。作者ならびに讀者の御諒承を得ておきたい。

ビイ玉を持ってば美し光のなかの海底の世にわれ坐りゐて
引汐のひき定まれば春の海のなごき冷たきに貝振りにつけり
目さむればよべの嵐はやみてをり五位驚渡る家の上の空
霧雨に紫陽花濡るる細き徑を兵またひとり召されてゆきぬ
初めの方から、かうした歌を抜いてみた。作者のたたくゆたかな
感受性の、よくうべなへる作品である。

波も石もすくれなるに染まりしが日没りてのち海の齒白し
わたしなども心にしかとどめてゐる情景だ。調子が弱いので結句
を生かし切つてゐないのが惜しい。
自在鍋に飯焚く聲のくすぶりてそれかあらぬか涙ながれ來

敗戦の第一首。さすがに見すこしがたい。

安ものの茶碗の汚れめにたちてわれの懈怠とみつづつ咎しむ
よい歌である。思ひがふかいよい歌である。

どれもみなまろき石なり神通のひろき河原を水流れゐて
この歌もすきな歌である。

風塵の外なるかなや南山の塔の九輪は白雲に入る
高野山の歌だが、じつによい。なんともいへずすがすがしい。

ひたむきに杉間みちのぼり來る人の汗あへし胸に小さき寫眞
初句がすばらしい。

堰堤も魚道も潤れて眞陽のもとダムしんかんと死にの靜けさ
そくそくと追つてくるものがある。

まこと祕かに季すごしゐて包み持つ念のほかの日々となりつる
かうした感慨は、われ人ともに頷ちあつたところであらう。

茨はぜし菜種の莖のすきとほり來啼くは何ぞ鶯に似る
この歌もよく生きてゐる。

那谷寺は石山石階石佛法を信するげにかたからぬ
心打つものがあるが、作者の力ではまだこなし切れなかつたものか。

そこへゆく「東尋坊」の

波に乗る磯の鶉の鳥のおどけたる首艶やかに春日照りつづ
は、のびのびとしてゐて快い。「平湯」や「乗鞍」の歌もなつかし
いものがある。

はりつめて苦しがるべし薄氷の今朝よりとけず夕べとなりぬ
ここまで見てきて、この歌などに作者の資質がいちばんよく出てゐ
るやうに思はれた。

春の夜の酒あたたむる火に映えて花散るが見ゆ暗き水の上

結句の「暗き水の上」がじつによい。

埃つばいブラックに住めば晩春の風非情なる音たてて居り
「非情なる」に同感を禁じ得ない。非情といふ言葉は、なるほどか
うした場合に使ふものだといふことを教へられた。

土に降る雨葉にふる雨をさきわけていまだ眠らず短夜の更
これもよい歌である。季節のあはれも、人のかなしさも、きはみが
ない。

まなかひは攀すべくもなき劍秀と夕冷えしるき石に凭れゐる
この歌も結句がよい。

月照れば咲き撻みたる萩の枝を風がゆすぶる水の上の影
平板な情景ながら、どこか新鮮で、理窟なしにうつくしい。

霰いたく顔を打ちつつこの非情すがしきばかり人を戀ふなる
三句、四句、すこしの無理もなく迫つてくる。しらべもすかつとし
て、生きる勇氣の出でくる歌だ。

うつむきて歩むわが眼をかずめさる光は水のなかにある星
この歌もうつくしい。
家のうちすすきもる風に夫とゐて何處へ坐りても寒き日の昏
誦むからにさむさむとする歌である。見すこしがたいので、擧げて
おいた。

遠くにて夜櫻がしきり散つてゐる夜半にめざめてふと思ふこと
水の如く低きにながれ流れつつ廣き海戀ふたのしさにあり
これといつて見どころのある歌とは思はないが、浅い思ひを淺いと
ころでそのまま捉へてゐるところに、引かれるものがある。言葉も調
子も、みなそのおなじところで動いてゐるままで捉へられてゐる。
抵抗なき夜ごろなるかなさびしさの極まるころ梅雨ふりやまず
一、二句が成功してゐる。ぜんたいの中にうまくはめ込まれて、梅

雨といふやうな單調なものの中に、多彩な陰影を生かし得てゐる。切
れ切れの句法も、勁いやうで柔かく、微妙である。

よしゑやし枯るるもよけれ大和なる竹の林に竹の花咲く
よい歌である。すぐにそらんじた。いつたんそらんじたからには忘
れ去ることできない歌である。

細きうなじに支へられたる幼兒の頭に記憶されゆく大人の言葉
この歌も、いかにも作者の面目を想見させる感銘のふかい歌だ。

いむかひて人の面の照りくもり月させるわざと知りてをれども
いささか理に落ちたきらひがあるが、よく歌ひこなされてゐる。わ
たしなどもかうした場合が、妙に記憶に残つてゐる。

蕭々と鳴る松風は心にふれまたつたひゆき行方しらずも
四の句の「つたひゆき」がいかにもよい。

黒き蝶黒きとんぼと二つながら喪服が似合ふと庭に來て云ふ
あまり氣持のよい歌とはいへないが、心にとまる歌である。それに
しても喪服といふものは、どうしてあのやうに艶なまでにうつくしい
のであらうか。

黒き蝶われの呼吸の如くにも靜かに翅をひらきまた閉づ
この歌もよい。
向ひ家のそりゆるき屋根に唇の如き赤き月そつと出てゐる夜ふけ
かうした童話風の歌は、このごろ流行のクレーの畫のやうなもので、
どこにはずす魅力がある。この歌では二の句がうまい。

月赤く照る夜の海にすきとほりくらげはや族ペロペロ泳ぐ
この歌も同様。「ペロペロ」が生きてゐる。

問題作といはれるやうな歌も数々あるが、わたしの好きな歌を擧げ
た。「砂の上」もさることながら、「夜櫻」とも名づけらるべき、な
つかしい歌集であつた。

○近頃の日本歌人は何となく元気がない。ことなぐめをそめておいて甚だたよりない感じだ。歌だつて良くなつてゐない。堂々めぐりをしつゝ。下手でも心が張り切つてゐれば結構人をうつものだが、ゆめをそめてゐるのでは仕方がない。

○これはいつたにどうしたといふのか。私も悪いには悪いが、いけないのは古参の諸君だ、古参だ、幹部同人だといふだけでぬくと胡坐を組まれては堪らない。勉強もせずまた努力もしないので、全體に雑誌がおとろへるのは當然のことである。

○尤も日本歌人は古参だとして決して勝手な眞似はさせないから、その段若い人々に壓力を及ぼさないが、古参の諸君も初心の當時を忘れては困る。いつまでも怠ける人、及び雑誌に協力しない人は今後遠慮せず切捨てて行く。

○昨今は新人がおびただしく増えつつある。若い人々の多くなるのはまことに喜ばしい。それらの中からよい人々をどんどん採りあげて行く。さういふ新人に悪影響を及ぼす舊人はひつこくでもらばねばならぬ。

○たとへば歌會だ。長い経験者にはそれほど大した意義はないかも知れぬが、しかしだからと言って出席を怠るのは協同精神が缺如し

てゐる爲だ。さういふのを恣意といふのである。私は責任者の故もあるが、歌會には殆んど缺席しないではないか。少しは物の道理を思ふがよい。

○勝手に長い間歌を休む人がある。その間は雑誌に對する義務もほとんど果さない。ところが何かの機會に作り出すと、今度は雑誌の選刊や休刊などについて小言をいふ。この種類の人々がいちばん困る。雑誌の選刊や休刊の根本は、實はさういふ良識の缺如した人の多いところに原因する場合が多いのだ。

○それから談は別だが日本歌人は男より女の方が歌がうまいと言はれるがそれは嘘だ。これは若い人々について言ふのではない。若い人々には今のところ男も女も五分々々だ。しかし中年の婦人達は近頃下手だ。歌集を出したり、出さうかといふぐらゐの年齢の婦人はだんだんよくない。すぐに慢心し、よい氣になつたり、又餘計なことにあれこれするからだらう。尤もさうは言つてもこの類に入らない人の方が無論多いけれど。

○雑誌はこれから緊縮主義をとる。無理して立派な雑誌を作つても仕方ない。第一マンネリズムの作品を幾ら澤山並べたところで意味がない。よい作品を少し出した方が効果的だ。尤も勉強する人々には十分活動の場を與へるべし。さうしてきびきびした雑誌を作ることしよう。さうして早く出すことだ。なほ念の爲に言ふが一切の選歌は従前通り私の責任によつてしてゐる。(前川佐美雄)

○歌集「砂の上」は好評である。今月は浅野晃氏から批評をいただくことが出来て、著者共々に感謝してゐる。たいへんよい批評であるから熟讀してほしい。なほ浅野氏の新著「主義にうごく者」は非常に興味ある本だ。といふよりはこのむづかしい世に生きてゆく上には、大變参考になる本だ。思想に苦しむものは是非讀まねばならぬ本だ。一讀をおすすめする。

○十一月にひらく出版記念會をはじめ、色々報告すべきことも多いが次號にゆづる。爽快な新秋、大方のお元氣をお祈りする。(編輯委員會)

轉 載 歌

前川佐美雄

藤原宮 趾

「春すぎて夏來るらし」と詠ましけむ持統天皇の宮趾どころをさなくつてわが幾たびか通りけむ藤原の宮趾鳴公のみち
鳴公村の小學校の窓に立ちて雨やむを待つ宮趾の夢生
役民の歌はのこれど平城の代のまへ藤原の宮はあとかたもなき
香具山の松の木の間に藤原の宮趾かへり見れば雲雀鳴くなる(週間讀賣八月二十八日號)

涼 氣

暑き日大峰山より歸り來てうつつなく臥し仙にもなれず
午前四時蟬よりも夙く起き出でて一番電車に乗り海水浴に行く
伊豆の小島に流されるも仙なれば夜々雲に乗り富士に飛べりき
雲の上の岩根ふみさくみ清水より鎗もて突きて獲し天の魚
水うちとみに涼しき風立てば庭よりあがりつくるに凭れる(政界往來十月號)

規 約 抄

- 日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
- 日本歌人は會員と同人と維持同人とから成り、會員は一月八十圓、(誌代六十圓と混同せぬこと) 同人は一月月二百圓、それぞれ六ヶ月以上を納めるものとする。維持同人は内規による。
- 投稿歌数は十首前後とする。但し一首を必ず二十文字以内で楷書で原稿用紙に認めること。締切は前々月二十日までのこと。歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。
- 添削は十首まで二百圓。但し返信用切手封皮同封のこと。
- 問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと
- 原稿用紙はなるべく日本歌人制定のものを使用されたく、一帖(百枚綴)大判百六十円送料四十八円、發賣所(京都市下京區佛光寺御幸町西入有限會社讀美堂内日本歌人原稿用紙部)發行所では取り次ぎはしない。

日 本 歌 人

(毎月一回二十日發行) 定價六十円・送料四円

昭和三十年九月十五日印刷
昭和三十年九月二十日發行

編輯印刷兼 前川佐美雄
發行所 奈良市坊屋敷町四一番地

發行所 日本歌人發行所
振替大阪四七二七七番

編 輯 後 記

○今月號は編輯委員會の編輯に成る第二號目といふわけだが、約束に反してこのやうに選刊したことを深くおわびする。これは明かに編輯委員會の手落ちであり、委員間の連絡に不備なところがあり、事務的に編輯のおくれ不備のないやうに注意し努力する。次の十月號はひきつづき出る。おくれでも中旬までには必ずおとどけ出来る筈である。

○編輯してみて氣付いたのは、休詠してゐる人の非常に多いことだ。雑誌がとぎれたりしたことに原因するのであらうが、毎月必ず出詠することいふことにして欲しい。中でも同人や維持同人などの本誌の中心たるべき人の休詠が目立つ。すぐとは行かぬだらうが段々積極的な氣分を盛り立てて行きたく、編輯もその方向に持つて行きたいと思ふから何卒よろしく御協力願ひたい。

○しかし考へると日本歌人は、短歌の革新に對しては最も積極的で意欲的な人々の集りであり、その精神は極めて強烈、また旺盛な雑誌である。編輯委員會としてはこれを更に強力に押し進めようといふのが希望だから、先輩の方々は勿論のこと、一般の會員諸氏もどんどん意見を開陳していただきたいとお願ひ申上げる。

日本歌人

十月號



昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
 昭和三十年十月二十日發行(每月一回二十日發行)
 昭和三十年十月十五日印刷
 第六卷第九號

通卷第三百三十九號

日本歌人

昭和三十一年

日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
 昭和三十年十月二十日發行(每月一回二十日發行)
 昭和三十年十月十五日印刷
 第六卷第九號

通卷第三百三十九號

日本歌人

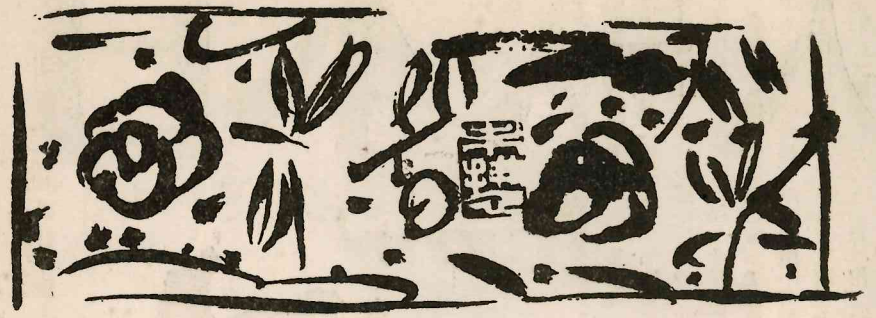


日本歌人社

石川信夫著 (最新刊)	歌集 太白光	定價三〇〇圓 送料三三〇圓
山村貴美著 (最新刊)	歌集 砂の上	定價二八〇圓 送料二四〇圓
横田俊一著 (最新刊)	詩的體驗	定價二〇〇圓 送料二四〇圓
日本歌人十五人集 (近刊)	歌集 魚道	
古川政記著 (近刊)	歌集 葦の芽	
土屋忠司著 (近刊)	歌集 題未定	

奈良市坊屋敷町四一
 日本歌人發行所
 振替大阪四七二八七番

定價 六十圓(送料四圓)



日 本 歌 人

十 月 號

第三百三十九號 目次

小 文 章 (十五)	前川佐美雄	三
十 月 集 I	安騎野志郎	四
短 歌 の 課 題 (四)	安騎野志郎	六
作 品 I	堀内民一	八
作 品 II	堀内民一	二
藤 野 の 紫 室 秀 吟 (五)	堀内民一	二
朝 日 歌 話 (四)	前川佐美雄	六
未 完 の 圖 (三十五首)	森脇基幸子	八
「太白光」の眞髓	古川政記	二〇
女 流 の 歌 等	田中克己	三
日 本 歌 人 集 I	田中克己	三
日 本 歌 人 集 II	田中克己	三
横 田 利 平 「虚 構」 評	梅上善治	三〇
十 月 集 II	梅上善治	三〇
吉 野 夏 行 記	梅上善治	四二
消 息 ・ 轉 載 歌	梅上善治	四四
後 表 紙 ・ 記	梅上善治	四四
表 紙 ・ カ ッ ト	棟方志功	四四

非滅亡論の根據

——小文章その十五——

前川佐美雄

短歌滅亡論を二月にわたつて特輯した綜合雑誌「短歌」は、来る十一月號を短歌非滅亡論の特輯に充てるさうである。私にも是非一文をすすめられてゐるが、數回の催促にもかかわらず、とうとう書かずじまひである。横田利平さんが書いて呉れたからいいやうなもの、いつものこととてまことに具合が悪い忙しきことも忙しかつたが、實は書きたいことが餘りに多すぎてどうにも始末がつかかなかつた、といふ方が正直である。

はじめ滅亡論の特輯號が届いた時、オヤオヤと思つたのだ。今ごろ何を思つての特輯號かと編輯者の頭を疑つたりもしたのであつた。世間が滅亡論など言つてゐる時でないだけに甚だしぬけの感がしたのも事實であつた。しかしすぐに成る程と合點出來た。

戦後すぐの頃には滅亡論が矢繼早に出たものである。いづれもみな歌壇の外部から持ち出されたのだが、それで歌壇が大あわてにあわて大騒ぎしたことが思ひ出される怒つて

みたり歌いてみたり、罵つてみたり悲しんでみたり、まさか喜んだのではあるまいだらうが、ヤケのヤツ八みたいに大喚きに喚きちらしてゐた向きもあつた筈である。けれども今はそんな滅亡論なんて誰も言はない。いつまでも他人事に構つてゐられるかといふが如く口を緘してしまつたのである。尤も萬年小僧はどこにもある。年がら年中これを商賣の資のやうにしてゐるものもないではない蓋しまともな人間のする業でない。

それはともかくとして、滅亡論といふ暴風雨の一過した歌壇は昨今まことにどかな秋日和のやうだ。暴風雨なんていつ過ぎたんだいや滅亡論なんて一向に知らないね。と言つた風の平穩さである。それで豊年萬作なら結構だけれど、實は平素少しも働いてゐないのだから、いづれも田は瘦せに瘦せて稲穂も大方空っぽである。到底滅收はまぬがれないが、他への手前や見榮もあることだし先づ平年作ということにしておかう、の類である。内心大いに困つてゐるくせに、何とかうまい具合に世間體をつくろひ辻褄を合はさうとす。要するに一時的におのれを糊塗し、他を瞞着することにしかならないものだがそれにあくせくしてゐるのが歌壇なのだ。

滅亡論なんて他から、また外部から持ち込まれるべきでないだらう。千年以上も経て來た歌であるからには、大概誰でも分り切つていさうなものである。ひとたびはその命數を疑つてみるほどでなければ、眞に誠實な歌よみとは言えない筈だ。かつて滅亡論を言つた尾上柴舟も釋道空もみなともに歌よみであつたことを思ふがよい。昭和のはじめに新興歌人連盟などを興した時も、他の人はどうであつたかよく知らないけれど、私自身の心の底にはやはりさういふ歌への疑ひがあつたのは事實である。

今の多くの歌よみ達と私の考へとは多少異なるところのあるのはもとより當然なのだ。彼らは傳統になすむことによつてそこから一歩も出られないか、又はこの傳統を重荷に感じるところからの脱出を思つてゐるかのどちらかである。でなければ歌を昔ながらの抒情詩として疑はないか、抒情詩への轉向を考へてゐるかのどちらかである。けれども私の場合はこのいづれの側にも屬さない全く別個の立場にある。いかに言ふとも歌は叙事詩でなく抒情詩である。さうして傳統から離れられず離れてはならない文學である。それを知り盡した上での非滅亡論でなければすべて全く無意味であらう。

それとなく表現されたものの中に、多くこの種のユーモアをみるこ
が出来るところが、この天眞な詩人も、うるはしいもの、優しいも
のに同情の思ひをよせ、國破れた現實に、驚きと悔恨の情をそそい
でゐる。

きんばうげにすみれ花まじりかくばかり美しき上もあへて踏むべ
き

この歌は戦時中の金陵女大の構内で詠まれただけに、一層意味がふ
かく感じられる。

糸やなぎやさしく垂れて水涸れし池見てゐるや三人姉妹

これは兆豊花園の一首、單なる景景とみることが出来ないのは、國
破れた中國の水涸れし池を思はせるからである。

國やぶれ山河ありけり背戸川のたぎちを染むる秋の日の色

この土に八千萬が生きて行くすべありと聞かば眉もひらかむ
日本を信じむひとを思はえは頼うち破りわぶるも足るまじ

國破れた歌の調べに山河はあつても、杜甫のかなしみはない。こ
でも天眞性に根ざす敗國の詩情に、驚くべき飄逸の感じを湛へてゐる
飄逸の歌は、

いくとせをおのれ殺しつつありふれば飄たりと言ふほけたる我を
邦おもふわれにはあらしもみち葉に狂ひてすぢす夕日さすまで
痛ましくされど美し風ながら雨打てよ打て秋閑のみぢぢ

今もなほうつつに生きて來しわれと我をおもはじ山ざくら花

太白光の歌は、戦時中の從軍の歌から、敗戦の現在の間にもたがつ
てよまれたものであるが、初め天眞の性は、次第に飄逸の風を帯びて
内化して來た。「花の幻」には清算されなければならぬものがあるや
うだが、よくそれをみる事ができる。年代順がわかれば、一層はつ

ともあれ抒情を主とし、しかも三十一字といふ短い形式に限定され
るとなると、これはむしろ女性の場である。和泉式部や建禮門院右京
大夫など、文學史的な女流歌人の存在をひくまでもない。私自身ここ
「日本歌人」の古くからの執筆者であるが、その執筆の大部分は、こ
ゝに據る女流歌人の批評文であつたことを記憶してゐる。齋藤史、前
川緑、梁雅子、山崎雪子さんと當時みな面識はないながら、ことは書
きはめてはめて恥かしからぬ人たちの、處女歌集の批評であつて、書
きながらも書き甲斐を感じた。純粹な抒情はこれら女流の側にあつて、
男性はむしろたじ／＼だとも思つた。もつとも抒情といつても、必
ずしも戀愛や親子の情愛には限らないが、外向的な男性が感情の正し
い表出よりも、むしろ感情の素因となる場の設定に懸命になつてゐる
間に、これらの女流はひたすら心の内奥をつきつめて、ひたすらに、
表出するので、讀者たる私が男性であるだけに、その眞摯に打たれる
度も強く、文字どほり低頭せざるを得なかつたのである。

いままた私の机上に一冊の女流歌集がある。山村貴美夫人の「砂の
上」である。夫人とは近ごろの知りあひで、知りあつたと思ふとすぐ
歌集を出された。會話でも感得される美しい夫人の感情が、活字で一
層はつきりわかつてうれしく、早速ひもどいたが、中でも私をしてお
そらく一生忘れがたくさせる一首がすぐ見つかつた。

わが世すでに終ると娘らに言ひにつつ晴れし日にその髪を梳きや
る

敗戦と題する十首の中の一首である。前古未曾有の事件である。内
地にゐた人々はあるひは豫想してゐたかもしれない。豫想し待ち望ん
でゐた人々にも感慨は大きかつたらう。私は當時兵隊として外地にゐ
た。そしてその感想を私なりにもつたが、他の人のそれを知りたくつ

きりすることが出来るが、いまはそれを必要としない。始めから太白
光の天眞な詩情は、眉をひそめて現實に深く切りこまない。この點は
物足らぬといへば物足らぬところだが、これが太白光の獨自な善さで
ある。現實をつかむ作者の大きな手は、現實の假象を叩きながら、い
つも宇宙の渾融するものの中に浸してゐる。さうして宇宙の流動する
ものにまかせて飄々と流れてゐる。ここに著者独自の歌の世界が創造
されてゐた。

太白光をよむと愉快になる。やせ細つたわれわれの心が、その天眞
でしかも豊かな詩情によつて、息をふきかへし、ふくらみを覺えるか
らである。しかし、前に述べて來た太白光の歌のどの要素がどのやう
に成長し、どう世界が創造されてゆくか。それを著者の今後の作品に
學ぶことはさらに興味深いことである。

女流の歌など

田中克己

「砂の上」の一首——

「短歌的抒情」といふことは、いやなことばだが、考へやうによ
つては、抒情詩の本流が短歌に移つてしまひ、詩はこのことばの提唱
者である小野十三郎氏のいふやうに、批評といふ、本來は詩の範疇に
屬しない仕事に、限られてしまつたことを、證明するのであつて、短
歌にとつては、一概に悪いことともいへないと思ふ。

て、注意してゐるが、この作品ほど、正しく一人の女人としてのそれ
をいひ表はしたものはないやうに思ふ。いな女人なればこその一層正
確な、ひたすらなその感情を表はし得たのだと思ふ。このとき山村夫
人は夫君を外へ送り出して疎開してゐたのだが、女ひとりの心と手
でこらへにこらへて來た嗚咽を今なほもらすまいとしながらも、無限
の悲哀——政治とはかけはなれたながらに戦つた民族の一として、敗
けた國民の一人としての、それをつひにこれほど適確に表はし出され
るかと思はれる位に表はし出したのである。まなむすめの髪を梳きや
る手のふるひも感じられ、一幅の名畫以上のものを感じさせる。さら
に私の同感と呼ぶのは「わが世すでに終る」の一句である。終戦後、
私自身は北京で切々とこれを感じた。歸國した東京ではさらに感じ、
今なほ事毎に感じる。「わが世」は大日本帝國にかけた野心ではない。
戦ひの中に、私ら中年の者の青春はすでに逝つたのである。今にして
思ふは子ら、若きらの未來をして、そのところあらしめたいとの、願
ひのみである。しかし顧みれば私などつひには歌ではもとより、詩で
もつひにこの一首のやうに一途に歌はなかつた。歌へるのを歌はな
かつたのではなく、實は歌へなかつたのである。記しつゝ、忸怩たるもの
を感じる。同感の詩人、歌人ありやなしや。

「砂の上」には、まだ多くのすぐれた作がある。いな全巻これ佳吟
といふべきだらう。しかし「わが世すでに」に感動しすぎて私自身疲
れてしまつた。少し他の事を語らしてもらはう。

歌稿締切

新年号（十一月十五日） 二月号（十二月二十日）

消 息

○六月東京歌會——十二日古川政記氏宅にてをりから上京中の野村幸子氏を迎へて石川信夫、木村賢一郎、森脇基幸子、名坂八千子氏ら二十人餘出席した。

○愛媛支部六周年記念歌會——六月四日齋藤富海子氏宅にて同歌會開催、大阪より新居濱に轉住の石橋幸増氏を迎へ、阪上史瑛、松本俊清、守谷翠城氏ら十七氏出席。また支部機關誌青橙を復活第一號を出した。

○防府支部歌會——倉重鈴夢氏宅にて古谷久里氏肝煎にて毎月集合、二十人ぐらゐ集まれる由である。

○七月奈良歌會——十三日猿澤池畔猿澤荘にて前川主宰他十五人集つた。

○七月大阪歌會——二十日上下本町近鐵裏の瀨連荘にて前川主宰他二十人餘出席した。

○九月奈良歌會——十八日秋篠寺にて前川主宰、堀内民一、横田利平、高木富貴子、奥谷道夫、安藤野志郎、池田和子、梅木春和氏ら十七人出席した。

○九月大阪歌會——二十五日北區緒方通熱にて前川主宰、日野弘堂、山村貴美、鳴上善治、井上佳洋子、阿曾邦雄氏ら二十三人が出席し大阪歌會の在り方について相談した。

○石川信夫氏は目下二、三の翻譯に多忙の由

編輯後記

○先月號はたいへんな遅刊となり、まことに申譯ない。色々事情があつたが編輯委員會もだんだん仕事にも慣れて來たので、以後このやうな不手際はないだらうと思ふ。今月號も先月號のあふりを食つて遅刊はまぬがれない。早急に取戻すべく努力する。但し今月號はやはり月末近くなるだらうと思ふ。次の十一月號を十一月月中旬に、また追つかけて十二月號を出し、さうして新年號を年内に必ず出さねばならぬ。ついでに歌稿の切ななどうか十分守つて頂きたい。新年號の切は特に早めて十一月十五日としたから、休詠してゐる人も揃つて顔を並べられなく、御一緒に揃つておけよと言ひたいのだ。

○吉野夏行は別掲記載の通り、昨年の高野山夏行におとらず賑やかない會であつた。保田、田中、五味、横田氏の講演の速記を取つておけばよかつたに後悔してゐる。來年の夏行は長野縣でと吉野で參會者の意見が一致したことを報告しておく。

○合同の出版記念會は來る十一月二十六日(土)大阪の浪速荘で開く。別掲記載の通りであるが、これは齊藤史、大伴道子、横田利平、近藤文子、山崎雪子、石川信夫、山村貴美氏ら七人七冊の歌集と横田俊一氏の評論集の記念會なので、どのやうな賑やかな會になるか、たのしみである。著者はむろん揃つて出

○古川政記氏は第二歌集を、土屋忠司、藤田歌連、吉田眞津恵氏らはそれぞれに處女歌集出版の準備中である。

○岩手縣花巻の三浦忠雄氏は關登久也、石川信夫兩氏の序文を得て歌集「さびしき神」を出版、好評の由。

○西垣和子氏はこの六月結婚し、目下東京在住である。

○森一郎氏は奈良女子大學附屬高校より東京日比谷高校に榮轉、夫人同伴東京に移住。

○東博氏は郷里鹿兒島に療養中であつたが、このほど恢復歸京した。

○小田原の加藤雅司氏は熱海病院にて逝去せられた哀悼に堪へない。

○佐々木信綱博士は六十年の業蹟を回顧して歌集と文集の二冊を上梓せられる。次號に詳報廣告する。

○芳賀禮氏は歐洲より歸朝した。

○五味康裕氏は新潮社から小説集「秘劍」を出版したが、忽ち六萬部を賣りつくしてベストセラーになつた。

○明治神宮秋の大祭奉祝短歌會は十一月六日午後一時より同神宮北休憩所で開催される。選者加藤時之、佐藤佐太郎、杉浦翠子、長谷川銀作の四氏。

○綜合雜誌「短歌」は、八、九の兩月號とも短歌滅亡論を特載して歌人の參考に資し決意を促した。

出版記念會豫告

日本歌人第四次出版記念會は十一月二十六日(土)午後四時から大阪上本町六丁目近鐵本社南側の浪速荘に於いて開催する。歌集のゆく(齊藤史)同譯夜(大伴道子)同ビキニの灰(横田利平)同花咲く時間(近藤久子)同海に近く(山崎雪子)同太白光(石川信夫)同砂の上(山村貴美)評論詩的體驗(横田俊一)の八冊の記念會である。次號に詳報するが、今からその日を繰り合はせられ多數出席下さるやう希望する。なほその日は午後一時から記念會までの間を日本歌人だけの歌會とする豫定である。

轉載 歌

前川佐美雄

秋の大和路

東京より來し少女らをとまひて菘なびく飛鳥古國を行く
曼珠沙華二莖三莖階に咲き夢殿本尊に供養する秋
大寺の柱に凭りて久しきに月出でて萩もおぼろになりぬ(唐招提寺)
執金剛の形相いよいよ凄しく秋風のなか曼珠沙華咲く
九体寺の門出でて白き雲のもと秋風を開き松の間に入る(讀賣新聞九月二十六日號特輯)

規約抄

- ・日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
- ・日本歌人は會員と同人と維持同人とから成り、會員は一月八十圓、(誌代六十圓と混同せぬこと)、同人は一月二百圓、それぞれ六月以上を納めるものとする。維持同人は内規による。
- ・投稿歌数は十首前後とする。但し一首を必ず二十七字以内に楷書で原稿用紙に認めること。締切は前々月二十日までのこと。歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。添削は十首まで二百圓。但し返信用切手封皮同封のこと。
- ・問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと。原稿用紙はなるべく日本歌人制定のものを使用されたく、一帖(百枚綴)大判百六十四送料四十八圓、發賣所(京都市下京區佛光寺御幸町四入有限會社讚美堂内日本歌人原稿用紙部)發行所では取り次ぎはしない。

日本歌人

(毎月一回二十日發行) 定價六十円・送料四円

昭和三十年十月十五日印刷
昭和三十年十月二十日發行

編輯印刷兼 發行所 前川佐美雄

發行所 日本歌人發行所 振替大阪四七二八七番

日本歌人

十一月二十號



日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
昭和三十年十二月二十日發行(每月一回二十日發行)
昭和三十年十一月十五日印刷
第六卷第十號

通卷第四百十號

日本歌人

昭和三十年

十一月二十號

日本歌人



日本歌人社

日本歌人

昭和二十九年八月十九日 第三種郵便物認可
昭和三十年十二月二十日發行(每月一回二十日發行)
昭和三十年十一月十五日印刷
第六卷第十號

通卷第四百十號

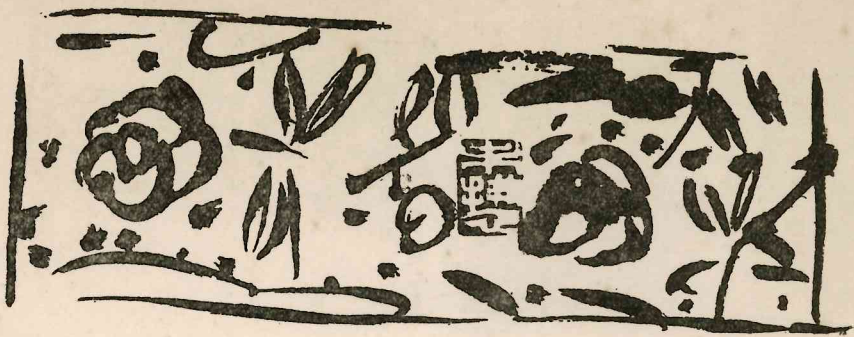
定價 六十圓(送料四圓)

- 石川信夫著 (最新刊)
歌集 太白光 定價三〇〇圓 送料三二〇圓
- 山村貴美著 (最新刊)
歌集 砂の上 定價二八〇圓 送料二四〇圓
- 横田俊一著 (最新刊)
詩的體驗 定價二〇〇圓 送料二四〇圓
- 日本歌人十五人集 (近刊)
- 歌集 魚道
- 古川政記著 (最新刊)
歌集 葦の芽 定價二三〇圓 送料二四〇圓
- 土屋忠司著 (近刊)
歌集 題未定

奈良市坊屋敷町四一

日本歌人發行所

振替大阪四七二八七番



日本文人

十一月二十日

第四百四十號 目次

小文章章(十六)	前川佐美雄	三
十一月集 I	天平雲の事(二)	四
短歌と詩	石川信夫	六
作品 I	田中克己	八
作品 II	堀内民一	一六
見の	花道空秀(六)	二四
朝日歌話(五)	安騎野志郎	三〇
日本歌人集 I	前川佐美雄	三三
日本歌人集 II		三四
宮崎智恵「金唐筐」評	富田敦夫	三六
佐佐木信綱文集・佐佐木信綱歌集	奥谷道夫	四〇
十一月集 II		四二
詩集「ふるさと」に寄せて	奥谷道夫	四四
消息・轉載歌	奥谷道夫	四六
後記	奥谷道夫	四八
表紙・カット	棟方志功	四九

作歌の仕方

——小文章十六——

前川佐美雄

この小文章も今回で十六回になるから、今年限りでうち切りたいと思つてゐる。こんな文章を書いてゐても別に大した用にも立たぬし、第一毎月書かねばならぬといふのが何となく負擔に感じられる。三枚半ぐらゐるものだから何でもいやなもの、是非書かねばならぬといふ氣持が重苦しく思はれるのである。こんなものを書く暇にも歌の一つでも作る方がよほどましだと思ふけれど、さうも行かないのは雑誌があるためである。雑誌といふのはみな出したがるし、四十代、五十代になつてからさへ出しはじめの人があつて、だから雑誌にはみんな魅力があるものらしい。私など日本歌人は若い時にはじめたから何でもなかつたものの、今若し雑誌を出さねばならぬといふことになつたらどうであらうか。私は二の足を踏むにきまつてゐるのだ。

雑誌なんかには苦勞し暇を取られるよりは歌を作り歌に心を盡してゐる方がどれだけのしにか分らない。多分歌だつてもつと上手にならと思ふけれど、なまじひ雑誌なんかをばし

めたものだから今では抜き差しならない妙なところにはまり込んだ氣持である。若氣の至りではやまつたことをしたものと後悔するが、もちろん之れと反対の氣持もあることはあるが、後悔する氣持の方が大きいことだけは嘘でない。

こんな小文章でさへ毎月書くのは嫌だと言つたが、それなら歌はどうかと言ふにやはりこれも毎月作つて出さねばならぬとなると厄介に思はれて仕方がない。義務的に作るといふのが面倒といふよりはその氣持がどうにも重苦しく思はれてならないのである。だから

よい歌の出来る筈もないが、何とかしてよい歌をと心掛けるけれど、自分自身氣の乗らない歌が人を氣に入らせることは全くありえないことだと思ふと、毎月作つて出す歌は無理をしてゐるだけに心は甚だ憂鬱である。かういふ氣持は石川信夫君は私よりもいっそう激しいから減多に歌を作らない。作らないでも雑誌の責任者でないからそれはそれでも構はけれど、私となるさうも行かないので今言つたやうな苦勞をしてゐるわけである。石川君は毎月五つか六つか作らないことを兎糞的作歌だと名づけてゐるが、それでもこの兎糞的作歌を彼は決して輕蔑してゐるのではない。彼の氣質や習慣は兎糞的作歌に適さない

といふだけである。半年も一年も、あるひは二年も三年も作らない時があるかと思ふと、作り出すと一度に五十も百も、いや二百も三百も作りつづけるのである。それが決して乱作でも凡作でもないのは、やはりたゞものでないといふよりは、その作歌の仕方は実に大変なのだ。決してらくらくと作つてゐるのもたやすく出来て来るものでない。作りあげたあとひどく肉體を消耗して瘦せおとろへてゐるのから察すると並大抵の苦勞ではなささうである。

石川君をタンにつかつては悪いけれども、私も実は石川式作歌を得意とするが、残念といふか幸といふか雑誌の責任者であるために兎糞的作歌も敢へてやむなくしてゐるといふ有様である。私はここ約二年間近くこの兎糞的作歌ばかりをつづけてゐるので、われながら不本意に思はれてならない。同時に毎月歌を作れ作れとすすめたり小言を言つたりしてゐる人々に対して何となくうしろめいた氣さへするのである。人には色々の作歌の仕方もあることだし、人それぞれの仕方を尊重することは尊重するが、兎糞的作歌も大事である。尤もこればかりになつてしまふのも困るけれど、それぞれの仕方によつてよい歌を作るやうにしたいものである。(談話)

短歌と詩

田中克己

短歌と詩とのけじめはどこにあるのだらうか。このごろ大分あやしくなつたので、このさい考へておきたい。なに三十一字が短歌で、それより短いか（これは殆ど無からうが）、長いのが詩だときめれば簡単である。しかし三好達治氏の處女詩集「測量船」のはじめに掲げてあつた

春の岬旅の終りのかもめどり

浮きつゝ遠くなりけるかも

といふうたは、私の記憶にして誤りなければ、二行にしてもあつたし、三十一音（實際はハルノミサキが六音なので三十二音）にもかゝらず、あの詩集の中のどの詩にも劣らず、純粹な詩のやうに思はせる。また歌人の方でも、昭和名歌集がたとへ編まれることがあつても、このうたをその中に編入しようとはなさらないだらうと思ふ。

してみると短歌と詩の區別は案外につかないのではなからうか。なほこのごろの短歌雑誌では、非定型短歌の叫びがなくなつたとはうらはらに、三十一文字などを守らねばならないなどは、誰も考へてゐ

ないやうに、私などには思はれる。例へば——いや例はよさう。私はあまり口調のよくない短歌はきらひなのである。

では短歌と詩とは、どこがちがふか。馬鹿の一つおぼえのやうだが、畏友小野十三郎氏によれば、短歌的抒情を盛つたのが短歌で、詩はこれを排除したクリティックである。これは實に明快な定義だが、これを見ても、實際からは多少むづかしいことが起りさうである。本當に詩はクリティックだらうか、そのみに限られてゐるか、と歌壇から居直つて聞かれると、私もはたじ／＼となる。現に私などは、二三日前の新聞に、秋に愛誦する詩として、佐藤春夫先生の「秋くさ」といふ詩をあげたばかりである。「秋くさ」のどこがクリティックなのだ、と歌人は仰せになつて然るべきだと思ふ。

さまよひくれば秋くさの

一つのこりて咲きにけり

おもかげ見えてなつかしく

たをれば、くるし、花ちりぬ

作り、理解しようとするのは何だらうか。その頃、もいちど短歌もしくは詩歌滅亡論がまじめに論議されると思ふ。

（四十頁下段より）

あまりにも美しく澄んだ世界は、却つてとりつきがたい點がないでもない。けれどもこれは私の品の低き境地の至らなさがさうさせるのに違ひない。

原子力兵器、死の灰、さては軍事基地擴張問題など、一連の問題をめぐつて物情騒然としてゐるこのごろではある。短歌の世界もそれを反映して動揺極まりない。現在の歌壇において難駁な固定的概念闘争を事とする輩が手をふつてゐるやうに思はれるのは悲しいことであるが、動揺すること自体は必ずしも悪いことではあるまい。

けれども短歌には自ら別の世界があるのではないかといふ疑問に答へるかのやうに、このやうな動揺の中にあつて、「金唐篋」三十五首が、確乎たる一つの乾坤を形成して、短歌といふものの一つのあり方を示されたことは、貴いことといはなければならぬ。

歌稿締切

二月 十二月二十五日限

三月 一月二十五日限

四十を過ぎて、いけしやあ／＼と「秋に愛誦する」もないものだと、呆れられた向もあるかと思ふが、これを作られた春夫先生は二十代、これを愛誦しはじめた私も二十代だつたのである。四十の手習といつて、このごろの習ひ、おぼえようとするのは「民主主義」をはじめどうも板につかない。私としては晩秋にはこの歌を口ずさみながら、はかなかつた自らの青春をしのぶのが、せめてもの心やりである。これが今の二十代の人には氣にいらぬとしても、それらの人々は、やはり詩を作る方がよからう。これは何も私が詩人だからいふのではなくて、詩壇では、また詩の約束では、この春夫先生と全く反対のものが許され、いな歓迎されてゐるからである。歌壇も同じだ、どこから聲が聞える。しからば詩歌といはずおしなべて抒情は否定されてゐるのだ。あとは長いのが詩で、短いのが短歌といふことにならうか。もつとも短歌でも連作といふ手がある。行をわけずにせいゝ三十数音までを一行にして、詩に似た何行かをお作りになつたら宜しからう。歌人よ、詩人に負けないで——詩人もしつかり——と私などは蝙蝠のやうに両方に應援をしておかねばなるまい。

追記 「日本歌人」から「短歌」の角川短歌賞の候補作品に推薦

された安騎野志郎氏の歌のことが問題だが、あれは横田俊一先生のお説では、リルケの詩の影響の濃いものといふことである。私はリルケには久しくごぶさたしてゐるので、氣がつかなくかつたが、リルケといはずエリオットといはず、この世紀の詩には共通なメタモルフオーゼンといふ方法を、短歌でとり入れるのは、いかにも賢いやり方だと思ふ。しかし難解な藝術が、その後のまたいそがしい四半世紀に受け入れられるかどうか。いまの寫真や絵本だけしか見ない少年たちが、青年になつてよみ、

消 息

○京都親月歌會——十月二日若沖の下繪によつて刻まれたといふ五百羅漢の石像で名ある洛南の石峰寺で午後二時から歌會、夜に入つて月見の宴、生憎曇天にて月は見られなかつたが、環境にめぐまれてよい會であつた。栗須逸、中村耕三、石川比良雄、見原種、坂田鈴子、緒方親、富田敦夫、仲つとむ、高橋和子、松本和子、松本邦夫、蒲田貞子、中堀爲男、川端厚、野原清子、堀内薫、佐々木育子、佐藤升美、上川こう、北川樹、片山晃、井上和子、三崎敏子、奥春三氏らが集つた。

○愛媛支部歌會——九月一日新居濱市中救の齋藤富海子氏宅で「青燈」復刊記念歌會、又、十月は同じく一日夜齋藤氏宅にて、新幹事は難波江葉史氏、「青燈」編集は吉田稔氏をえらんだ。十一月は十三日同じく齋藤氏宅にて、福田良子氏ら十二名集つた。

釋道空歌碑建設

この冬も老いかゝまりて奈良の京新の能を思ひつゝ、居む折口道空先生がその晩年、春日大社にこの絶唱を寄せられました。これは先生がその民俗學の大系をたてられるに當つて、常に心に深く抱かれた民俗藝能に對する愛情の奔り出たものであつて、我々の胸を打つものがあります。この度春日大社の正遷宮を記念して、この先生の絶唱を原寸のまゝ銅板に寫し、石に彫り込んで、小さい乍ら美しい歌碑を春日野の萬葉植物園の楓樹疏林の中に建てることになりました。先生の學篤を敬仰し、先生の麗しい歌を愛唱する皆様の御後援を得て、少しでも立派な歌碑に致し度いと思ひます。金額の多少に係らず合力を御寄せ下さいますならば誠に幸甚に堪へません。昭和三十年十一月一日 奈良市春日野町 春日大社 水谷川忠麿 小規 募疏一口を假りに金百圓と致します 送金先 奈良市春日大社 振替大阪一七一〇番 期日 昭和三十一年二月末日限り 建碑式 昭和三十一年三月中旬

編輯後記

○毎月連刊の辯を書いてゐるのも藝のない話である。何と取り戻さうと思つてゐるうちに年末におし迫つて來た。やむなく十一月號と十二月號を合併の形で本號を出す。つまり一月休むことになるが、かうしなくては來年度の順調な發行が覺束ないからである。新年號はどうしても年内に出さなければならぬ。その爲のやむをえない處置と了承していただき。そのかはり來年度からは連刊休刊は絶対にしないことを確言し約束する。即ち新年號は十二月末までに、二月號は一月末迄に出すといふ風にするつもりである。編輯委員會の名譽のためにもこのことは必ず實行する。

○就いては歌稿も締切期日にはおくれぬやうに届けていただきたい。會員の方は割合に正確に守つて下さるが、同人維持同人などいふ人々がたいへんにルーズである。それに休誌する人が又なかなか多しやうだ。新年號にはどういふ顔が並ぶか、今から見ものといふところだが、一人もかかさず皆出詠といふ風にして行きたいと思ふ。二月號の締切は十二月二十日、おそくとも二十五日迄のこと。○それと同時に會費の滞納が甚だ多い。正直に言ふと雑誌は毎月かなりの赤字である。これは前川先生に御迷惑をかけてゐる。何とも言はれないけれど相當の額にのぼるやうであ

る。これは前川先生にお氣の毒であると同時に、正確に納めて下さる人々に對してもお氣の毒に思ふのだ。どうか會のため雜誌のために呉々もよろしくとお願ひ申上げる。滞納の人々は本號受取り次第お拂込み願ひたい。歳末だからつきりと區切りつけておきたいのである。このこと特に申上げる次第である。○無粋なことばかり言ふやうだが、これがやはり現實である。實に仕方ないからである。來年は會員の倍加運動も活潑に實行し、日本歌人を名實共に歌界第一の雜誌にして行きたい。いづれ新年號で御相談申上げるが、心にとめておいていただきたいのである。○新年號は充實した雜誌になる筈である。歌や論文の他に座談會の記事や、また内部歌評も前川主宰が執筆すると言はれてゐるから期待していただきたいのである。○別掲廣告の通り佐佐木信綱先生の歌文集二冊が出た。先生の全歌集が納められてゐるからこれ一冊で十何冊かの歌集が全部見られるわけである。日本歌人發行所宛に送料共申込まれると取次いでいたゞける。減多にない機會であるから御購讀をおすすめする。○又、別掲廣告の通り奈良春日神社萬葉植物園に釋道空(折口信夫博士)の歌碑が建てられる。さきの藥師寺佐佐木信綱博士の歌碑同様、大方の御協賛をおたのみ申上げる。○それでは無事御越年あるやうにお祈り申上げる。新年には元氣でおめにかかりたいと願つてゐる。(編輯委員會)

規約抄

・日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
・日本歌人は會員と同人と維持同人とから成り、會員は一ヶ月八十圓、(誌代六十圓と混同せぬこと)同人は一ヶ月二百圓、それぞれ六ヶ月以上を納めるものとする。維持同人は内規による。
・投稿歌数は千首前後とする。但し一首を必ず二十七日以内で楷書で原稿用紙に認めること。締切は前々月二十日までのこと。歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。
・添削は十首まで二百圓。但し返信用切手封皮同封のこと。
・問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと。原稿用紙はなるべく日本歌人制定のものを使用されたく、一帖(百枚綴)大判百六十圓送料四十八圓、發賣所(京都市下京區佛光寺御幸町西入有限會社讚美堂内日本歌人原稿用紙部)發行所では取り次ぎはしない。

日本歌人

(毎月一回二十日發行) 定價六十圓・送料四圓

昭和三十年十二月十五日印刷 昭和三十年十二月二十日發行

編輯印刷兼 前川佐美雄 發行所 奈良市坊屋敷町四一番地

發行所 日本歌人發行所 振替大阪四七二七番